小樽のひとに学ぶ

【2017 年度版】

小樽商大生が
小樽のひとにインタビュー

国立大学法人小樽商科大学

文部科学省
地(知)の拠点

はじめに

この冊子は、昨年度に引き続き、小樽商科大学の学生が地域の特徴や課題を検討する授業の一環として小樽在住の方にインタビューし、記事にまとめたものです。

お話を伺った22名の方は、様々な領域でご活躍されており、年齢は50代から90代までの幅広い世代にわたります。本年度は、老舗企業や飲食店、文化芸術などに関わる方に加え、朝鮮半島から渡って来られた方、ロシアとの交流、戦争の記録に尽力されている方など、より多面的にインタビューを実施しました。

一方、インタビューした学生は、小樽のことをまだよく知らない1年生が中心で、学生たちはこのインタビューを通じて、小樽を学んでいきました。学生は、3～4名のチームでインタビューを実施して、2千字程度の記事を作成しました。今回は、インタビュー内容を少しでも多く記事に盛り込むため、昨年度より500字程度増やしました。

多様な歴史文化が現在もまちの至るところに息づいる小樽を理解するには、小樽のひとから学ぶことが重要です。このインタビュー記事が小樽の魅力を再発見するきっかけの一つとなれば幸いです。

お忙しい中、インタビューを引き受けてくださった皆さまに、深く感謝申し上げます。

インタビューは、平成29年度の小樽商科大学の地域志向型授業(グローバリズムと地域経済、担当教員：江頭進)および、本学のグローカルプロジェクトの一環として実施しました。

授業のテーマは、主に昭和30-40年代の小樽に関する歴史・社会・風俗・文化の調査を通じて、地域の特性や課題を洗い出すことで、大学で必要とされる課題発見力、社会調査法、そして正しい日本語の表現方法を身につけることを目指すものです。

授業は全15回で、小樽の特徴(歴史文化、社会経済)、取材方法、記事のまとめ方、フィールドワーク(小樽市内バスツアー)、ゲスト講師による講演とディスカッション(渡邉英彦氏・富士宮やきそば学会会長、平成29年5月13日)により、地域社会への理解を深め、取材と記事の作成方法を習得しました。

グローカルプロジェクトでは、インタビュー先を中心に、手宮界隈の5名の方と学生による公開座談会「小樽のひとに学ぶ～手宮の歴史文化とまちづくり～」を開催しました(平成29年11月14日)。公開座談会の内容の一部を本冊子に収録しました。

本冊子の編集は、高野宏康(小樽商科大学グローカル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部・学術研究員)が担当しました。

目次

はじめに …… p03

インタビュー関連MAP …… p05

チーム01 小樽の飴屋（飴谷 むつ子さん） …… p06

チーム02 石炭の街・小樽の盛衰（上参郷 光祐さん） …… p08

チーム03 越後屋と小樽の遊郭（越後 久司さん） …… p10

チーム04 笑顔を届けるお菓子屋（工藤 仁嗣さん） …… p12

チーム05 本場韓国の味を小樽へ（小久保 武雄さん） …… p14

チーム06 そば屋と運河保存運動（小川原 格さん） …… p16

チーム07 町会とまちの絆（五宮 一治さん） …… p18

チーム08 手宮の厩町に生まれて、教師に（佐藤 彰芳さん） …… p20

チーム09 戦争の記憶の発掘と継承（鴫谷 節夫さん） …… p22

チーム10 手宮の居酒屋とまちづくり（嶋影 良彌さん） …… p24

チーム11 花園の中華店（鈴木 幸安さん） …… p26

チーム12 観光都市・小樽のはじまりの頃（田宮 昌明さん） …… p28

チーム13 小樽の歴史文化と観光（土屋 周三 さん） …… p30

チーム14 小樽のピアニスト（中川 和子さん） …… p32

チーム15 小樽名物、花園だんごの誕生（新倉 吉晴さん） …… p34

チーム16 詩人のまち小樽（萩原 貢さん） …… p36

チーム17 朝鮮半島から小樽へ（平田 晴久さん） …… p38

チーム18 草の根交流がつなぐロシアと小樽（本間 雅子さん） …… p40

チーム19 漁業から水産加工業へ（松田 亙さん） …… p42

チーム20 ホラ吹き昆布屋と小樽（蓑谷 修さん） …… p44

チーム21 北海道の洋菓子喫茶のさきがけ（八木 明美さん） …… p46

チーム22 故郷・小樽に捧げた12年（山田 勝麿さん） …… p48

公開座談会「小樽のひとに学ぶ ～手宮の歴史文化とまちづくり～」 …… p50

インタビュー関連 MAP

1 飴屋六兵衛本舗
2 株式会社樽石
3 越後屋陶器店
4 六美
5 焼肉大仁門 色内本店
6 籔半
7 稲穂二丁目会館
8 手宮三丁目（旧・厩町）
9 緑丘戦没者慰霊塔
10 ざっかす島影
11 華舟
12 銀行街（サマーフェスティバル会場）
13 小樽市総合博物館 運河館
14 中川和子さんがピアノと出会った家（相生町）
15 小樽新倉屋 花園本店
16 喫茶コロンビア（現在、小樽詩話会の例会場）
17 在日本大韓民国民団小樽支部
18 日本ユーラシア協会小樽支部
19 株式会社小樽海洋水産
20 利尻屋みのや 不老館・小樽歴史館
21 米華堂
22 小樽市役所

小樽の飴屋

飴谷（あめたに） むつ子（むつこ）さん

飴谷製菓株式会社

プロフィール

宮城県出身。宮城県立白石女子高校卒。宮城学院女子大学家政学科卒。仙台白百合女子短期大学に助手として勤めた後、飴谷製菓七代目である飴谷佳一さんと結婚。現在は同社で勤務している。飴谷製菓（株）は初代、飴屋六兵衛氏が富山で飴屋を始め、明治24（1891）年に三代目が小樽に渡り、大正7（1918）年に創業した。今年で創業百年を迎える老舗であり、現在は七代目、飴谷佳一さんが代表取締役として経営にあたっている。

私たちは、飴の製造販売を行う飴谷製菓の七代目飴谷佳一さんの妻である、むつ子さんにお話を伺った。飴屋製菓の歴史は江戸期まで遡り、元は富山県で「飴屋六兵衛」の名で水飴売りをしていたのが始まりで、明治24（1891）年に三代目が小樽に渡り、大正7（1918）年に創業。今年で創業百年を迎える老舗企業である。現在、今では数少なくなってしまった飴の製造会社として、小樽のみならず、全国各地の人たちからも愛される飴を作り続けている。私たちは、長年にわたって小樽とともに歩み続けてきた飴谷製菓についてお話を伺った。

今と昔で小樽の変わったところ

―飴谷製菓は今年で百周年を迎えるということですが、飴谷さんから見て今と昔で小樽の変わったところはありますか？

飴谷さん：私達の業界から見ると、昔と比べてお菓子屋さんの数が減りましたね。30年程前にはたくさんあった飴屋も今では私たちを含めて2店になっていますし。現在は飴を扱ってくれる問屋さんの数も減ってしまいました。

地域に根ざした飴作り

―現在の方が昔よりも経営が難しくなっているのでしょうか？

飴谷さん：ええ、そうですね。ですが、今は小樽の地域に根ざした飴づくりという方針はそのままに、フルーツ飴など、若い人たちに受けそうな爽やかな飴づくりに力を入れています。

小樽に関係の深い「雪たん飴」

―小樽に関係の深い飴というとどの様なものがあるのでしょうか？

飴谷さん：「雪たん飴」という飴ですね。この飴は飴の中にあんこを包んだ物なのですが、石炭の積み出し港だった小樽の石炭に雪が積もった様子をイメージして作りました。雪たん飴は安くて手軽に持ち運べる上に、高カロリーなので石炭積み出しの作業員の方たちによく売れていたそうです。あとは「バター飴」ですかね。昔は北海道のお土産と言えばバター飴、と言われるほど人気でした。バター飴は、東京、大阪、九州などの物産展、空港のお土産屋さんで今でもよく売れています。

材料の品質の良さが第一

―雪たん飴を実際に買って食べてみたのですが、すごく美味しかったです。材料も小樽に関わるものを使っているのですか？

飴谷さん：小樽といいますか、北海道で店を構えると決めた時の条件として、材料の品質の良さが第一で、お水や甜菜糖が大変美味しいので北海道に決めたそうです。

箱館戦争の最中に小樽へ

―先程、北海道に店を構えると決めたと仰っていましたが、創業者はどの様な経緯で小樽に来られたのですか？

飴谷さん：確かな記録は残っていないのですが、箱館戦争の最中に三代目六兵衛が飴商人として北海道に渡って来たらしいです。戦争となりますと薬がたくさん消費されますが、当時の薬は苦かったので、服用する時に甘い飴を一緒に舐めて苦さを中和していたらしいです。箱館戦争が終わった後は石炭の積み出し港として発展していった小樽をみて、移住してそのまま定着したそうです。

今のお客さんの層

―なるほど。昔は労働者によく飴が売れていたとのことですが、今のお客さんの層はどの様な方なのでしょうか。海外の観光客も飴を買いに来ますか？

飴谷さん：修学旅行シーズンは学生さんが多いですね。また、近所のご年配の方々がコミュニケーションツールとして使うためにも買ってくださったりしますね（笑）。昔からうちの店を贔屓にしてくださっているお客様も多いので大事にしていきたいです。この間はハワイから旅行に来たお客様や、韓国の記者の方が取材に来てくださったりしました。

まとめ

―飴谷さんのお話を聞いていると、昔のスタイルではなく、株式会社化したり、露店販売を始めるなど、工夫を凝らして経営してきたことが印象的だった。また、新しい種類の飴を開発したり、飴だけにとどまらず、ホワイトチョコレートの製造にも取り組んでおり、どんどん新しい分野に挑戦し続けている姿勢がとても印象的だった。

これまで築いてきた歴史や伝統にとどまらず、常に流れ行く時代としっかり向き合っている。未開の世界でも、果敢に突き進んで行く経営方針に開拓者の心意気を感じた。このことが、急激に変化していった小樽で、小樽の人たちに愛され、親しまれながら暖簾を守り続けられた秘訣なのかもしれない。

現在、八代目を継ぐ予定である、三男の基伸さんが将来を見据えて、会社の工場で働いており、日々、修業を続けている。この先、世代が交代されても新しい商品を生み出し、伝統を守りつつ、飴谷製菓の歴史をさらに積み重ねていっていただきたいと思う。

雪たん飴。

飴谷製菓。現在地にきて約 40 年になる。

飴屋六兵衛本舗のキャラクター。

露店販売の屋台。露店販売は十数年前から始めた。それ以前は製造と卸のみだった。

チーム 01
佐々木 悠人・成田 聖一・古川 大我・武藤 光貴

石炭の街・小樽の盛衰

上参郷（かみさんごう） 光祐（こうすけ） さん

株式会社樽石 代表取締役社長

プロフィール

昭和39（1964）年、小樽市生まれ。同58年、札幌光星高等学校卒業。同61年、北海学園大学建築学科卒業。大学卒業後、東京で2年半の仕事経験を積み、父が経営する株式会社樽石に勤務。小樽のまちづくりイベント、ポートフェスティバル・イン・オタルや、オタル・サマーフェスティバルに関わる。「雪かき選手権2017 in 小樽」では実行委員長をつとめ、小樽の地域活性化にも貢献している。

私たちは、小樽の石炭産業と小樽の盛衰について、上参郷光祐さんにお話を聞かせていただいた。上参郷さんは現在、株式会社樽石の代表取締役社長である。同社はエネルギー事業だけでなく、「くらし創りのお手伝い」をテーマに小樽の人々の生活を支えている。

会社を継いだ経緯

―樽石を継いだ経緯を教えてください。

上参郷さん：樽石は、昭和22（1947）年に祖父である上参郷騰とその仲間が一緒に作った北海道物産株式会社が始まりです。同24年には、北海道炭礦汽船株式会社の指定を受け、小樽石炭株式会社と商号を変えて本格的に石炭販売を開始、同45年にはガソリンなどの石油製品を主とする総合商社として、株式会社樽石となりました。私が大学を卒業する頃には私の父が社長をしており「会社に入るか、どうするか」ということになりました。大学時代、私は北海学園の建築学科で建築の道を目指していましたが、父からの誘いを受けて大学4年の時に自分で決断し、会社に入ることを決めました。それから東京で2年半ほど同業の会社で実際に働いたあと小樽に戻り、樽石に入社しました。

樽石の小樽での役割

―樽石は小樽のどのような役割を担っていると思いますか？

上参郷さん：皆さんご存知の通り、小樽は北海道有数の港町としてスタートしましたが、小樽が発展した理由の一つとして鉄道が敷かれたことがあると思います。東京や横浜に鉄道が敷かれた理由はもともと人を運ぶためですが、幌内鉄道、すなわち小樽の鉄道は石炭を運ぶことが主な目的でした。つまり当時エネルギーとして重要だった石炭を運ぶことで発展した小樽というまちで、当時、本社はその役割の一部を担わせていただいたと思っています。

今では家の暖房のために石炭を利用する人はいませんよね。企業には30年限界説があり、商品はどうしても陳腐化してしまいます。どこかで使われなくなる可能性があるんですよね。企業が生き残るためでもありますが、お客様が求めていること、お客様の目線に合わせて、事業を石炭、石油そしてLPガス、さらにはリフォーム事業へと移りかわらせてきました。

これまでの事業展開

―樽石は長年石炭の事業を展開してきたということですが、キッチンなどのリフォーム事業を始めた経緯を教えてください。

上参郷さん：石炭という商売をしていく中で、お客様に「樽石さん」って言われるのですよ。それはなぜかというと、今の石油を運ぶよりも人の労力で60キロくらいの重たい石炭を担いでお客さんのお宅まで届けに行き、よくお話しさせてもらいました。そのような中でお客さんに認められて信頼関係が築かれているから「樽石さん」と呼んでいただいているのだと思います。そういった関係性を築いてきたため、「上がってお茶でも飲んでいきなさい」という世界でした。上がらせていただいた時には、コンロでLPガスを使っているためガスコンロを見させてもらい、徐々に「キッチン回り、少し古いので新しいのに変えませんか」といったかたちでリフォームをしていくようになりました。決してリフォーム事業は我々にとって突飛なものではなく、エネルギーを中心としたコンロやキッチンのような周辺の仕事ということです。最近ではガス回りだけでなく新築リフォームなども手掛けていて、大学時代建築学科で学んだことが活かせていると思います。

小樽が衰退した理由

―現在とは違い、小樽は経済都市でしたが、衰退した理由は上参郷さんから見てどうお考えですか？

上参郷さん：その当時小樽が繁栄した理由の一つとして、石炭産業の集積地だったので、そういう意味では小樽は人もお金も集まるまちだったと思います。それから日露戦争に日本が勝って、明治38（1905）年のポーツマス条約により樺太の南半分が日本の領土になりました。樺太との交易は今のように飛行機があるわけではなく、船で行っていました。船は小樽の港から出ていたので、人の往来は激しかったと思います。そういう意味では、小樽が衰退した理由の一部として、樺太との交易がなくなり、さらに石炭が石油に代わったことで、物流や人の流れが変わったことが考えられると思います。小樽の繁栄期にたくさんあった銀行も全て札幌に移ってしまいましたしね。ただ、ある意味ありがたいのは、急速に衰退していったので、壊せなくて、今ある歴史的な建築物が残ったことです。そのような歴史的建造物があるのは小樽の魅力だと思います。

小樽にこだわりがある理由とは

―樽石は70年にわたって小樽で事業を行っていますが、小樽にこだわっている理由はどのようなものでしょうか？

上参郷さん：「樽石」だからね（笑）。札幌でも一部の事業を展開していますが、それ以外の営業所が余市、岩内など、後志にもあります。逆に言えば札幌で仕事をすればそのお金は小樽に返ってくる。札幌のお金を使わせてもらっているので、札幌に進出することは考えていないです。長い間小樽で歴史を重ねてきているので、スタンスは小樽で変わらずに行きたいですね。

今後の小樽との関わりについて

―これからの小樽と樽石との関わりについて、どのようにお考えですか。

上参郷さん：私はいつも「くらし創りのお手伝い」というスローガンをテーマとしています。そして、日本全体で見れば、石炭や石油がよく使われているのはやはり北海道ですよね。お客様が温かい暮らしを送りたいと思うから、今の樽石があると思います。そういったお客様の気持ちを大切にしていき、時代の変化に合わせながら人々の暮らしをお手伝いさせていただきたいです。小樽の人口減少に関しては、会社の役割としてできるだけ多く雇用することで、小樽の人口に貢献していきたいと考えています。

まとめ

―小樽の経済都市としての発展、衰退そして現在、小樽のエネルギー事業を牽引してきた樽石の社長である上参郷さんならではの視点からお話を聞くことができた。私たちの世代は身近に石炭がなかったのだが、実際に石炭を触らせていただき、当時の石炭のお話を聞かせていただいたことで石炭と小樽というまちのつながりが見えた。観光のまち小樽という印象が、長い歴史を経た伝統あるまちという印象に変わった。

インタビューの様子。

会社外観。

見せていただいた石炭。

チーム02
吉田 歩夢・張 雨凡・有原 真由・勝谷 紗衣

越後屋と小樽の遊郭

越後（えちご） 久司（ひさし）さん

越後屋陶器店

プロフィール

昭和元（1926）年、小樽市花園生まれ。同17年、北海商業高校（現・北照高校）卒業後、北海運輸局に勤務。当時の官庁の暗号文書解読などの仕事に携わる。同22年、退職。父・久左衛門の死後、越後屋陶器店の手伝いを始める。同年、二代目店主になり、陶器店を経営。小樽市博物館歴史文化調査会会員をつとめるなど、小樽の歴史に詳しいことで知られる。運輸局勤務時代の小樽空襲の体験を語り部として伝える取り組みを続けている。

私たちは、花園にある地元に愛され続けるお店「越後屋陶器店」の二代目店主、越後久司さんにお話を伺った。かつて小樽は経済都市として繁栄していた頃、遊郭が大いに賑わっていたと言われる。明治44（1911）年に花園で越後屋陶器店を創業した久司さんの父・久左衛門さんは、その遊郭の一つ「南郭」と深い関わりを持っていた。今回は久司さんに越後屋陶器店と南郭の関係についてお話しを伺った。

遊郭とはどのような場所だったか

―小樽の遊郭は具体的にどのような場所だったのでしょうか？

越後さん：船乗りの人たちが遊ぶ場所でしょうか。船乗りの人たちは給料が良く、お金をたくさん持っていたのですが、小樽に和人がやってくるようになった当初は、あまり遊ぶ場所がなかったそうです。それで国からの許可が出ていくつか遊郭ができました。現在の松ヶ枝町にあった南郭もその一つです。南郭は港から遠いので、船乗りたちは人力車で向かうこともあったそうです。遊郭には芸達者で教養も高い花魁もいました。大人の遊び場と言えばわかりやすいでしょうか。夜も昼も、一日中盛り上がっていたそうです。

越後屋と南郭

―越後屋の創業者である久司さんのお父さん、久左衛門さんと遊郭は具体的にどのような関係があったのでしょうか？

越後さん：遊郭というのは、お客さんか出入りしている商人以外は、基本的に入れない場所です。当時、南郭の経営者の一人だった八木周蔵さんという人がいますが、南郭に勢いがあった大正時代に、その人が私の父・久左衛門を商売上手という理由で、出入り商人として認めてくれたのですね。廓内の出入りだけでなく、花魁相手の商売も許可されていました。誰もが出入り商人になれるわけではなく、八木さんから信頼を得られた人だけがその遊郭に入れるわけです。当時、「南郭に鳥の鳴かぬ日はあっても、越後屋の印半天の見えざる日はなし」といわれるほどだったそうです。遊郭があった当時、私はまだ子供だったので、外からしか見たことがありませんが、一言で言えば大人の世界でしたね（笑）。

遊郭の発展と衰退

―遊郭はどのようにして小樽で発展し、なくなってしまったのでしょうか？

越後さん：港町として栄えていた小樽に来るたくさんの船乗りたちは小樽で遊ぶ場所を求めていました。国からの許可がおりて小樽でも始まった遊郭は、現在の信香町の一部にあたる金曇（こんたん）町で始まりました。しかし、火災のために明治14（1881）年に住之江（現在の住ノ江・住吉神社前）へ、そして同33年には松ヶ枝町へと遊郭地は移転していきました。同40年には現在の梅ヶ枝町にも遊郭が設置され、こちらは北郭と呼ばれました。小樽の遊郭は裕福な船乗りを中心に発展してきましたが、八木家の遊郭、鯉川楼は、昭和7（1932）年に八木周蔵が亡くなった翌8年、廃業となりました。周蔵のあとを継いだ豊吉がお抱えの娼妓全員を解放し、店をたたむことを宣言しましたが、当時としては画期的なことです。その後、戦争の時代になったこともあり、遊郭は勢いを失っていきます。いまでは南郭の入口にあった大門も姿を消し、南郭を知る人はほとんどいなくなってしまいました。

越後屋陶器店と花園の商店街

―越後屋陶器店は花園にありますが、越後屋陶器店と花園の商店街について教えてください。

越後さん：越後屋陶器店のあるところは、大正2（1913）年に花園中央会が発足し、昭和49年には小樽花園中央商店街となりました。両隣の北門商店街、入船商店街の中央に位置するので、「中央」商店街と名付けられたと言われています。当時はとても賑わっていましたが、平成23（2011）年に商店街振興組合は解散し、任意団体の商店会として、以前の花園中央会に戻りました。

―昔の商店街と今の商店街の違いについて教えてください。

越後さん：昔と今の商店街は、まず訪れる人の数が違います。花園銀座商店街、すなわち花銀は小樽で一番の娯楽街でした。花園公園通りには映画館が多くて、いつも人で賑わっていました。あと、昔は人とのつながりが深かったから、映画をツケで観たりしていました。家族ではなくても、お隣さん同士でいろいろなことを手伝いあったりしました。今ではお隣さんが誰で、どんな人かもわからない世の中になっていますが、大きく違います。

―花園で陶器店を長く続けることができたのはなぜでしょうか。

越後さん：人と人との信頼関係ですね。スーパーなどができてからもわざわざうちの店に陶器を買いに来てくれる人がいます。ありがたいことです。

まとめ

―今回、越後さんへのインタビューを通じて、陶器店と遊郭の関わりという小樽の意外な一面を知ることができた。遊郭は現在の価値観では、非難されがちな部分もあるが、経済都市・小樽の光と影を理解する上でとても重要である。

今回のインタビューはとても貴重な体験となった。「人」から学ぶことで、その人自身の目線や感情、その人だからこそ聞けるものも含まれており、より実感のある歴史を学ぶことができた。

最後に、越後さんに長く陶器店を続けられた理由について問いかけると、「人と人との信頼関係」とおっしゃっていたことは印象的だった。本当に越後さんは信頼が厚く、地元に愛されていることを実感した。

店内にある陶器の数々。

越後屋陶器店。

大正13年6月11日に南郭付近で撮影。後列中央が越後久左衛門。

インタビューの様子。地図や資料を用いて説明してくださった。

チーム03
後藤 桃佳・澤谷 陽太・武田 純輝・細川 怜央

笑顔を届ける お菓子屋

工藤（くどう） 仁嗣（ひとし）さん

株式会社六美 代表取締役

プロフィール

昭和36年（1961）年、小樽市生まれ。大学卒業後、札幌の「一燼庵（いちあん）」、東京の「Enfant」、札幌の「きのとや」で10年間修行を積む。その後、六美を継ぎ、現在、代表取締役。北海道の原材料、自家製餡にこだわりをもつ。六美は同6年に餅屋「みどり乃」として創業。六つの味のすあまを「六味餅」として販売したところ評判となり「六美餅」として親しまれた。餅の販売量よりもお菓子のウエイトのほうが多くなったため、同54年、菓子舗「六美」に改名。

港町として栄えた小樽。昭和初期から現在に至るまで、小樽と共に歴史を重ねてきた菓子舗「六美」。私たちは「六美」の三代目代表取締役、工藤仁嗣さんにインタビューを行った。工藤さんの菓子職人としてのこだわりはもちろん、意外な才能や「六美」が長い間、小樽の人々に愛されてきた秘密などをお話いただいた。

「六美」の経営理念とは

―「六美」の経営理念は何ですか？

工藤さん：美味しいお菓子を食べると自然と笑顔になりますよね。どんな状況であってもお菓子を食べることで一瞬でも笑顔になってほしいという願いから、「六美」は、「私たちはお客様に笑顔と安心を与える菓子を提供するために感謝・感動を忘れることのないように切磋琢磨します」という経営理念を掲げています。

小樽で創業したきっかけ

―小樽で創業したきっかけを教えてください。

工藤さん：創業当時の小樽は、港町として物資の運搬・取引などで札幌よりも繁栄していました。よって、港湾関係者からの様々な注文や、近くにあった日本軍の練兵場からのまとまった注文を確保できました。また、緑町の地獄坂付近で開業したのは、海側に下っていくと、市役所があり、近くには小樽高商もあって、商店街として繁栄していたためです。

餅屋から菓子屋へと変わった理由

―なぜ餅屋から菓子屋に変わったのですか？

工藤さん：昭和6年（1931）に、「六美」の前身である餅屋「みどり乃」が開業しました。その頃の小樽の港湾業は機械が普及しておらず、今よりも重労働でした。そのため手軽に食べることができて腹持ちのいい餅の需要が高かったので六味餅を売り始めたそうです。その後、時代が進むにつれ、労働における機械化が進んだ結果、作業車などが普及し、工事現場などではクレーンが使用されるようになり労働者の負担が減りました。それに伴い、餅の需要が以前よりも減り、労働者は餅よりもお菓子を好むようになったといわれます。さらに労働者よりも一般市民のお客様の方が多くなり、お菓子の需要がより高まったので、昭和54年、菓子舗「六美」に変わりました。

お店を継ぐと決めたきっかけとは

―「六美」を継ぐことに決めたきっかけは何ですか？

工藤さん：修業時代にシェフから「人の作ったメニューを作れるようになってようやくスタートだ」と言われました。それから修業をしているうちに経験が蓄積し、初めて自分のお菓子を作れるようになりました。その時が「六美」を継ぐと決めたタイミングだったと思います。

今後のお店の展開プランとは

―今後お店をどのように展開する予定ですか？

工藤さん：大手企業のように、大量生産を意識した製造は行わず、コストや時間、手間がかかっても小樽のまちをモチーフにしたお菓子づくりを大切にしています。そのため、他店と同じようなお菓子づくりは行わず、チェーン店を作らず、海外進出をするつもりもありません。輸送費が高く、賞味期限が長く持たず、美味しいお菓子を提供できなくなってしまうからです。現在、「六美」のワインゼリーをDEAN＆DELUCAさんのほうでPB商品として販売しています。「六美」で売るワインゼリーには小樽のワインを使っていますが、PB商品のワインゼリーにはフランス産のワインを使っています。

新商品の考案について

―新商品を作る流れを教えてください。

工藤さん：新商品のアイデアは考え込んで作るよりも、それとは関係ないことをしている時にふと思い浮かぶことが多いです。そのため、アイデアが浮かんだときはすぐにメモを取るようにしています。

また、料理レシピのサイトに投稿された一般の方が考案したレシピから良いとこ取りをして、頭の中で新商品のレシピを考案しています。もちろん思い通りに新商品が作れないことも少なくないです。むしろ、商品化できなかったものの方が多いです。100を越える失敗作の中から生まれた商品が「六美」を支えてきました。例えば、ワインゼリーは商品化まで2年もの時間がかかりました。ゼラチン・着色料・香料などを使用せず、ワイン本来の香りや色をそのまま味わえるようにしました。ワインソムリエとして有名な田崎真也さんに、「味と香りだけでワインの銘柄が分かったのは初めてだ」と称賛されたことがあります。

六美のこだわりとは

―「六美」のこだわりは何ですか？

工藤さん：科学的に配分を考え、自分の理想通りの味・香り・食感のお菓子作りを目指しています。例えば、ワインは毎年酸味が違うため、pH値を計測してデータ化し、計算をして配合を毎回変えて味を安定させています。お客様の健康面を考慮し、香料や着色料は使用せず素材本来の良さを活かしたお菓子づくりを心掛けています。さらに、北海道や小樽の原材料を使用したお菓子づくりにこだわっています。メーカーに特別な材料を頼んだ時には「そんなものはない」と言われることがあります。ですが、私はたとえ小さくとも可能性があるのなら、それにかけてお菓子をよりおいしくする新製品を作り出す努力をしています。例えば、解凍して美味しく食べられる生クリームは、新製品として世の中に出回る前に私たちが開発していました。その際、特許をとっていればよかったですね（笑）。さらに、自分の本当に納得のいくお菓子を作るために、道具づくりも自分の手で行うこともあります。お菓子づくりに使う木枠を宮大工の友人に作り方を教えてもらったり、機械が壊れた時、即座に修理できるように溶接の技術を教わったりしました。そのようなこだわりを大切にすることで顧客も安定し、大手などに真似されたとしても味のこだわりにおいては絶対に負けない自信作を作ることができます。また、商品だけではなく店内の内装にもこだわりがあります。看板の六美という文字は小樽出身の書道家、宇野静山さんに書いていただきました。そして、店内の木の色、濃さにもこだわりがあります。洋風すぎず、和風すぎない。洋菓子と和菓子を売っている「六美」ならではのバランスを考えた茶色となっています。

商大生へ伝えたいこと

―小樽商科大学の学生に伝えたいことはありますか？

工藤さん：まちの活性化のために、実現可能かどうかは別として、何か面白いことに挑戦していく心を持ってほしいです。小樽市は人口が減っていて、町の活性化には若者の力が必要です。大人たちを若者の力で動かしてほしいです。

どのようなまちにしていきたいか

―小樽をどのようなまちにしていきたいですか？

工藤さん：小樽の特徴を活かしたイベントを開催することにより、観光客の増加や小樽の活性化につなげることが期待できると思います。

まとめ

―今回のインタビューを通して、地獄坂で多くの商店が閉店していった中で、「六美」が長年愛され、店を続けてこられた理由は経営者のお客さんとお菓子づくり、そして小樽のまちへの熱い思いにあると気づいた。工藤さんはお菓子づくりの材料となるものの研究や簡単な道具の製造などを自ら行っている。自分の理想通りのお菓子を作るために自分でやれることはなんでもやる。その好奇心が工藤さんを動かしているようだった。ぜひ、読者にも「六美」のこだわり抜かれた美味しいお菓子を口にしていただきたい。

六美の店内。

インタビューの様子。

「小樽美人 和クレープ 余市りんご」のポップ。菓子の説明が詳しく書かれている。

チーム04
石川 星斗・伊藤 大致・遠藤 七菜・遠藤 祐希

本場韓国の味を小樽へ

小久保（こくぼ） 武雄（たけお） さん

焼肉大仁門 代表取締役会長

プロフィール

昭和3（1928）年8月13日、金泉市（韓国）生まれ。8歳の頃、20歳年上の兄に連れられて大阪へ。その後、パチンコ店やリサイクル業、雑品屋を営み、同46年、小樽に「焼肉大仁門」を創業。大韓民国民団小樽支部団長を約30年務めている。民団を通じての両国の友好への貢献が認められ、平成23（2011）年、当時の韓国大統領から勲章を授与された。

私たちは、小樽に3店舗を構える「焼肉大仁門」創業者の小久保武雄さん（韓国名は金 渠煥：キム・クーファンさん）にインタビューをさせていただいた。小樽に60年以上住んでいるという小久保さんは地域活動にも熱心な方で、小樽市民向けに韓国旅行の企画や韓国語講座などをやっていたこともある。今回、小樽と韓国の架け橋のような役割を果たしてきた小久保さんに、「焼肉大仁門」の創立の経緯や経営、小樽のまちについてお話していただいた。

創業の経緯

―「焼肉大仁門」を創業するまでの経緯をお聞かせください。

小久保さん：朝鮮半島から兄と一緒に日本へ渡って来たのは8歳の時です。電機メーカーや軍輸送部の助手をやっていましたが、小学校を卒業後は兄に頼らないように山形でパチンコ店を経営しました。秋田などにも店舗を増やしていきましたが後につぶれてしまいました。そんな頃、17歳の時に小樽を初めて訪れました。知り合いがいたので小樽に移住して、リサイクル業をやって暮らしていました。しかし、鉄くずの減少などによってそれもうまくいかなくなりました。当時は高度成長期の時期で、これから飲食業が伸びると思い、韓国の焼肉文化を伝えたかったこともあって、それまでに貯めた資金で小樽に焼肉店を創業することに決めました。

小樽で好まれる味を目指して

―「焼肉大仁門」をオープンするまで、オープンしてからの苦労はありましたか？

小久保さん：焼肉のたれに関しては苦労しました。元になっているのは韓国のたれで、開発には兄の妻にも手伝ってもらったんですが、なかなか納得がいきませんでした。最終的には自分で納得いくまで研究・改良を繰り返してやっと完成させました。食後に牛筋でとった出汁をたれに注ぎ、スープとして飲んでもらうサービスも始めました。

また、創業直後の大仁門ではカルビとホルモンしか出していませんでした。当時、北海道は豚肉を食べる習慣が根付いていたため、創業初期の経営状態はかなり厳しいものでした。しかし、お客さんを裏切らないような最高品質の肉と特徴のあるたれを提供し続けたことで、改善に向かっていきました。

大仁門らしさで勝負

―他の店との競争に勝ち抜くために意識してやっていることはありますか？

小久保さん：他店はあまり意識していないです。強みを挙げるなら、大仁門は肉で勝負しているということです。ほとんどの肉は国産を使っていますし、改良を重ねたたれもありますので味は他の店には負けません。サイドメニューは他店の方が豊富だと思います。それにお客様のことを考え、ぬくもりのある接客をするという大仁門らしさを貫けば、他の店との競争を意識しなくても自然とお客様は来てくれると信じています。

お客さんの層は

―客層はどのような層を意識していらっしゃいますか？

小久保さん：年齢は若い年代の人々ではなく、経済的余裕が出来てきて家庭も落ち着きだす中年層がメインです。また、8割が常連さんで、残りの2割が観光客などの流動客です。8割も常連さんが占めているだけに中途半端なサービスをしてお客さんを裏切ることはできません。いつもおいしい肉とたれを提供することを心がけています。

小樽の魅力とは

―最後に、小樽の魅力は何だと思いますか？

小久保さん：人間性が温かいことですね。昔から小樽にすんでいる人が多いので顔見知りが自然と増えてきます。だから横のつながりが強くて、商売をする上で互いに支えあう関係というものが出来上がっています。私は朝鮮半島出身ということもあり、毎年20人ほどを観光旅行として小樽から韓国に連れて行ったり、韓国船の通訳をしたりしてきました。韓国と小樽をつなぐ役割をしていただけに、小樽との深いつながりを感じています。これからも韓国語講座や韓国旅行を通じて市民との交流を深めていきたいです。

まとめ

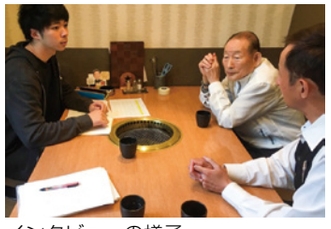
―インタビューを通して、大仁門は小久保さんが開発・改良を重ねた伝統のスープだれを受け継ぎ、肉のおいしさで勝負するという、大仁門らしさを貫いていることがわかった。質の良い肉や他店にはないスープだれを提供することで、顧客の信頼を得て、その顧客を裏切らないよう努力を続けてきたことや、小学校卒業後から独立して培ったパチンコ店やリサイクル業での経営経験が長年の経営を成功させた要因であると考えられる。

また、小久保さん自身、民団の団長として小樽に貢献し、小樽市民からの信頼が厚いことも今年で創業46年になる大仁門が今でも小樽市民に愛されている理由の一つであろう。

現在、経営は息子さん、お孫さんに譲っているが、大仁門がこれからも末永く小樽市民に愛され、さらなる活躍を期待したい。

焼肉大仁門 色内本店。

カルビ焼肉ランチ。


インタビューの様子。

スープだれ。

チーム05
大久保 友貴・大嶋 晃治・大山 勇真・岡田 彩希

そば屋と運河保存運動

小川原（おがわら） 格（ただし）さん

株式会社籔半 代表取締役

プロフィール

昭和23（1948）年、小樽市生まれ。小樽潮陵高校卒業。同43年、芝浦工業大学入学。同49年、株式会社籔半入社。同59年、代表取締役に就任。父親に頼まれて後を継いで「籔半」二代目店主となる。運河埋め立てに反対し、保存運動に尽力した。ポートフェスティバル・イン・オタル、小樽雪あかりの路の立ち上げに関わるなど、小樽観光まちづくりに積極的に関わってきた。平成16（2004）年、観光カリスマに選ばれる。同19年、小樽観光協会理事、観光まちづくり委員長に就任。籔半は昭和29年に開業。

私たちは、小樽の運河保存運動に尽力したことで知られる、籔半の小川原格さんにインタビューをさせていただいた。小樽の魅力は何か。今の小樽観光の現状はどうなっているのか。小樽の観光まちづくりに尽力してきた小川原さんにお話を伺った。

お店を継いだ経緯とは

―まず、小川原さんがお店を継いだ経緯について教えてください。

小川原さん：もともとは後継ぎは嫌で、そば屋とは無関係な、東京の大学の建築学科（芝浦工業大学）に進学したんだよ。当時、小樽の父親から、籔半が再開発ビルに入居するか、移転して開業するかの相談を受けたので、東京の流行っている店と流行っていない店を見て回っていた結果、帰ってしまった。父親の口車に乗せられてお見合い結婚して、「失っちゃだめなものを持ったから頑張るか」っていうかんじで会社を継ぐことになったのさ。東京での生活はいろいろ役に立ったよ。お洒落なお店が多いし、まちも面白いね。大学の生協で働いていたこともあるけど、そこで学んだことを色々活かすことができたよ。4年目で籔半の売り上げが増えて、父の代を超えたしね。

お店で工夫していることとは

―そば屋として工夫していることはなんですか？

小川原さん：心からおもてなしをする。ひとつひとつ丁寧にね。マニュアルじゃない。お品書きも手作りで、文字情報のみで誘ってお客様に迷いながらメニューを決めてもらう。お客さんが次来た時にこれを食べようって思ってもらえるようにね。サンプルケースは蝋が溶けると汚れちゃうから出してない。

運河保存運動当時の小樽とは

―次に小樽運河保存運動についてお伺いします。運河保存運動を始めた当時の小樽のまちの状況を教えてください。

小川原さん：小樽は戦後のスクラップアンドビルドがなくて歴史的建造物が多かったのが東京帰りの自分には新鮮に見えたんだよね。当時の小樽は環境が悪く、運河が荒れまくっていて、なおかつ経済力もなかった。運河にはゴミの不法投棄などでヘドロが溜まっていて最悪の状態だった。市としては運河を埋め立てて道路を作りたいということだったんだ。

運河保存運動を始めたきっかけとは

―なぜ運動を始めたのですか？

小川原さん：このまちの歴史の古さは二度と作れないのさ。札幌とは違う。まちが元気じゃなくなって店が倒産したら困る。そば屋にお客さんが来るようにするためには小樽に人が来ないといけない。運河は小樽の大きな魅力だから守らないといけない。まちづくりのキーとして必要だったんだ。きちんと論争して、その上でどうするか決めるならいいけど、そういうプロセスがなかった。市民が議論に介在してなかった。道路か保存かの二者択一で済むのか。色々な道がある。ちゃんと議論した上で後悔しないように決められたらいいと思ったんだ。

ポート・フェスティバル開催の経緯

―ポート・フェスティバルの開催の経緯を教えてください。

小川原さん：若者だけで話す場を新たにつくろうと「ポート・フェスティバル・イン・オタル」を立ち上げたんだ。その時は20代の若者が中心だったんだよ。商大生のようなね。いまのフリマみたいな店が400軒ほど並び、約8万人がきた。若者がやったからではなく、このまちだからこんなに来た。活動のためにTシャツ販売などで地道に資金を稼いだよ。運河保存のことは最初は前面に出していなかった。ポートフェスティバルの第7回目の時に、初めて「運河保存」という言葉を使ったんだよ。

小樽の魅力とは

―小樽の魅力はなんでしょうか？

小川原さん：歴史的建造物がたくさん遺っていることだね。小樽の運河は湾曲しているから、歩くのに疲れないでまちの奥まで見える。あちこちに魅力的な住宅など建物がたくさん見られるから、寄り道が楽しいまちだね。ぶらっと歩くことで自分が知らなかった店や建物に出会えるんだよ。手を加えないで観光地になるのが小樽。それが札幌との違いだよね。

小樽の観光都市としての現状とは

―小樽観光の現状はどうでしょうか？

小川原さん：まだまだ、鎌倉や京都などには及ばない「にわか観光都市」だね。堺町通りは歴史的建造物が魅力なのに、条例違反ギリギリで、看板の色をショッキングピンクやどぎつい色にしているお店がある。まちの品格をこわしているんだ。また、小樽には外国人観光客が増えているのに、英語などの看板が整備されていない。根本的なところがなっていない。自分の店だけでなくまち全体でお客さんを迎える観光都市にならないといけない。まち全体でという気持ちがなければ観光都市にはなれないね。

次の世代に期待すること

―次の世代に何を期待しますか？

小川原さん：何かをやって満足するだけでなく、今よりもっと良くするために、批判的な目で見て、積極的に発言してほしい。若い世代がもの申すみたいな姿勢を見せてくれても良いと思うね。

―最後に、商大生へ一言お願いします。

小川原さん：駅と学校の行き来だけじゃなくて、自分が4年間生きていく地域のことをもっと気にかけて、知ってほしいね。せめて地域の人の半分くらいの知識を持っていかなきゃその人たちの本当の思いは理解できない。若い時の4年間は貴重だよ。心に残るわけだから、ここは自分のまちだって思って気にしていてほしいよね。

まとめ

―インタビューの中で小川原さんは積極的に話をしてくださり、様々な話を聞くことができた。そば屋を本業として経営し、小樽観光にも関わっているからこその視点が興味深かった。小川原さんによれば、小樽観光はいま危険な時期に入っているという。商大生の私たち一人一人に何ができるかをよく考えていかなければならない。

籔半。

インタビューの様子。

チーム06
奥田 沙生・尾澤 泰介・小野 綾子・椛澤 友貴乃

町会とまちの絆

五宮（ごみや） 一治（かずはる）さん

稲穂地区連合町会 会長

プロフィール

昭和11（1936）年、小樽市生まれ。小樽緑陵高校（現・小樽商業高校）を卒業後、父親が営んでいた青果食料品の二代目として勤務。60歳の時、日之出町会会長に就任。現在、稲穂地区連合町会会長を勤めている。稲穂二丁目町会をはじめ様々な活動に関わっており、環境美化活動や防災活動・暴力追放活動などを推進している。趣味は、町会の仲間とのパークゴルフやお酒を飲みカラオケをすること。

今回、私たちのチームは、稲穂地区連合会会長や防犯協会連合会会長などを務めている五宮一治さんにお話を伺った。町会の成り立ちや経済都市として栄えていた時の小樽についてなど、興味深い話を聞くことができた。

生い立ちとは

―五宮さんのお生まれはどちらですか。学生時代の思い出などもよろしければ教えてください。

五宮さん：私は生まれも育ちも小樽です。高校は小樽緑陵高等学校、現在の小樽商業高等学校に通ってました。私が小学校4年生だった時に終戦を迎えてね。その翌年、小学校5年生の時から修学旅行が始まったんだよ。小学生の時は登別に、中学生の時は洞爺湖に行ったね。高校生の時は配給されたお米を持って行ったのさ。高校生の頃は、早弁をよくしていたもので、お昼休みになると友達と地獄坂を登って小樽商大の食堂に10円のうどんを食べに行ってたよ。緑陵高校を卒業した後は、石川県出身の父親が経営していた青果食料品店を継いで二代目として働くようになったんだ。60歳の時に日之出町会会長となり、現在は稲穂地区連合会会長をしています。近所に住んでいたおばあちゃんに「あのガキ大将が今では町会会長なんてね」とよく言われたものですよ。

町会会長になった理由

―どうして町会会長になろうと思ったのですか？

五宮さん：私が町会会長になったきっかけは、前会長が辞任することになって、引き継ぐ人がいなくて、仕方なく引き受けたかたちだったんだね。昔は町会会長というのは名誉職で、なりたいと思う人がたくさんいました。でも今は、町会会長になりたくないという人が多いのが事実だね。ボランティアで役員になりたいという人もどんどん減ってきています。そもそも町会の成り立ちは、町会のトップが小樽市総連合町会です。現在の小樽市は小さいものも含めて151の町会があり、その151の町会が20ブロックに分かれていて、それを地区連合町会といいます。町会というのはピラミッド型をしていて、私が最初に会長を務めたのは、ピラミッドの一番底辺の日之出町会会長で、そこから長年をかけて今の役職に就いたんだよ。

町会とともに発展した経済都市・小樽

―五宮さんは生まれも育ちも小樽と伺いましたが、経済都市として栄えていた時の小樽について教えてください。

五宮さん：小樽は昔からニシンがよく獲れ、波風が立たない港として有名だったんだ。船を動かしたりいろいろな燃料になっていた石炭を夕張や三笠の炭鉱から運んでくる必要があって、手宮線が作られたのさ。手宮線は北海道で最初に引かれた鉄道で、このことが小樽の経済都市として栄えるきっかけになったと思います。さらに樺太と交易したことで、小樽はどんどん発展していきました。一時は札幌よりも人口が多く、日本銀行の支店ができるほど数多くの銀行が小樽に建てられたのさ。私は小樽が経済都市から衰退してしまった原因は、樺太交易がなくなったことが大きな原因だと思っているよ。

商大生に期待すること

―これからの小樽の発展に関して、小樽商科大学の学生に期待していることはありますか？

五宮さん：私が小樽商科大学の学生に期待することは、小樽に企業を誘致して大学を卒業した後も、小樽で就職し住み着いてもらいたいということかな。そうすれば、その人たちが結婚し家庭を築くことで人口も増やせるはずだからね。小樽に大学があることは良いことだが、小樽に企業がないせいで、みんな他に行ってしまって、小樽の人口は減っていく一方だよ。みなさんも札幌出身だろうし、アルバイト先だって札幌でしょう。裏返せばお年寄りにとっては住みやすいまちではあるけど、お年寄りは購買力が低いし、まちの活性化にはならないのが問題点だね。町内会では会費のうちで一番の大きな支出は街路灯なんだよ。小樽の街路灯の維持管理は各町内会が行っていて、小樽市内では真っ暗な所はないはずです。でも、最近は町会の活動に参加してくれる若手がいなくて、もしこのまま町内会が無くなってしまったら誰がその街路灯を維持していくのかを一番危惧しているね。

町会とまちの絆

―五宮さんにとって町会とはどんな存在ですか？

五宮さん：私にとっての町会は、一番はやはり地域の絆、コミュニケーションの輪だということです。特に、小樽の町会は若手の力が弱くて、今後、町会として何かをしようと考えることは難しいのですが、これからも近所の人たちとの絆を大切にしていきたいです。何か新しいことを始めるにも、まず絆を作らないことには何も始まらないと思うよ。

まとめ

―今回のインタビューを通して、かつて経済都市として栄えていた時の小樽から、小樽の現状についてまで幅広く理解することができた。特に今の小樽が抱えている人口減少などの地域課題への解決策を私たちのような若い世代が考え、実行していかなければならないということを再認識することができた。

インタビューの様子

稲穂二丁目会館

チーム07
神山 直輝・菊池 朋佳・小杉 英久・小柳 紘季

手宮の厩町に生まれて、教師に

佐藤 彰芳さん

元高等学校 校長

プロフィール

昭和11（1936）年、小樽市厩町（現・手宮3丁目）生まれ。小樽桜陽高校卒業後、バンビキャラメルで知られる旧池田製菓、田中酒造に勤務したが、教師への強い想いから日本大学に入学。卒業後の同41年、29歳で小樽商業高校に勤務する。その後、仁木商業高校、苫小牧西高校（教頭）、小樽商業高校（教頭）、帯広南商業高校（校長）、室蘭商業高校（校長）を歴任し、60歳で定年退職。定年後は北海道文教大学に勤務。現在は、町内会長の仕事や家庭菜園を楽しんでいる。

私たちは手宮地区の厩町で生まれ育った佐藤さんに、厩町の歴史や変遷についてお話を伺った。

今と昔で小樽の変わったところ

―手宮の厩町（現在の手宮3丁目）はどんなところでしたか？

佐藤さん：厩町は現在の手宮3丁目で、ホーマックの向かい側の崖裏の谷間にあります。その崖下沿いには、線路がひかれ、かつてはその先の海に木造の巨大な高架桟橋がかけられていて、石炭貨車で運ばれた石炭が石炭運搬船に船積みされていました。平地のない谷あいにある厩町は、頂上にある末広中学校方面へ向かって一本の坂道になっており、両側の傾斜地に住宅が密集しています。当時は約300戸の家が密集していて、米屋、酒屋、魚屋、薬屋、青果店、鍛冶屋、理髪店、銭湯などたくさんの店があり、また、鉄鋼所やベニヤ板製造工場、飼料肥料工場、冷蔵倉庫、石油タンクなどがありましたが、今では石油タンクしか残っていません。以前、鉄鋼所跡地付近から温泉が出て、日帰り温泉「湯の花」ができました。

住民の多くは、先に挙げた企業や港湾関連の仕事に従事していました。海に面しているので、ニシン、シャコ、ウニ、昆布、小魚、タコなどを獲る磯周りの漁師の家も数軒ありました。また、木造の底引き漁船を持つ漁業会社も三社ありました。隣町の高島町には、多くの木造底引き漁船を持つ漁業会社がありましたし、造船所が数社ありました。

私の父は船大工でしたが、厩町に函館ドックの支社が来た時に下請の仕事をしていました。函（かん）ドックは修理する船を入れる時、両サイドの函に海水を入れて沈め、船が入ると海水を抜いて浮上させたドックの上で修理作業をしていました。

余談ですが、終戦の年、小樽も空襲されました。その時、船の船首を魚雷で損傷させられた駆逐艦が修理のためにドック入りしていましたが、この船からの砲撃でグラマンを撃墜させたと聞きました。

池田製菓に勤務していた頃

―池田製菓で勤務されていたとのことですが、その頃のお話を教えてください。

佐藤さん：池田バンビ（旧池田製菓）には高校卒業後すぐに入社しました。3年2ヶ月ほど勤めていましたね。ちょうど池田バンビが最盛期を迎えていた頃です。工場は毎日見学に訪れる人が絶えませんでした。多い時には数百人の人々が訪れました。工場見学に訪れると、必ず2個入りのキャラメルと下敷きやノートなどの学用品がもらえたんです。それを目当てに来る小・中学生や、一般の方々など多くの人が訪れていました。

池田製菓での勤務内容

―池田製菓では佐藤さんはどのようなお仕事をされていたのでしょうか？

佐藤さん：私は宣伝カーに乗って北海道各地を訪れ、多くの人にバンビを知ってもらうための宣伝活動をしていました。ミスバンビの方々とバンビの社員2～3人が宣伝カーに乗り、キャラメルを積んで各地を訪れました。今はメーカーから直接小売店に販売されていますが、昔はその間に問屋があったんです。昔の北海道は交通機関が発達しておらず、車もそれほど普及していなかったのでメーカーの負担を減らすために各地に問屋が発達していました。メーカーは問屋に買ってもらわなくてはならないし、問屋は小売店に買ってもらわなくてはいけないので、私たちは問屋の社員も宣伝カーに乗せ、音楽を流して小売店の前に行き、車の中のウグイス嬢が「○○商店様、いつもご愛好ありがとうございます。」と呼びかけて宣伝していました。

当時の人気商品とは

―当時の人気商品はどのようなものでしたか？

佐藤さん：キャラメル・ドロップをはじめ、豆菓子が人気でしたね。うぐいす豆、銀杏豆などです。今の若い子たちは知らないだろうけど、ピーナツロールというピーナツの殻の形をした飴もとても人気でしたよ。

田中酒造に勤務していた頃

―その後は田中酒造にお勤めになったのですね。

佐藤さん：そうです。バンビに勤めて3年10ヶ月目の事です。終戦後、戦時中に統合されていた小樽の六つの酒造会社は独立していきますが、最後に独立した田中酒造からお声がけいただきました。同社では、自社の商品を問屋や小売店に買ってもらうために直接交渉する仕事をしていましたが、教師という夢を諦めきれず、1年ほど勤めた後、大学へ進学しました。社会人になってから大学へ進学するということで、他の人たちより遅いスタートを切ることになりました。

社会人経験後の大学進学について

―他の人とは違う道を選んだということで、勇気のいる選択だったと思うのですが。

佐藤さん：そうですね（笑）。高校卒業後すぐに大学に進学した人からは「今から大学に行って遅くないのか」と言われましたよ。それでも、将来を考えた時にこのままの自分で本当に良いのかと疑問になったんです。

今後の小樽について

―今の小樽は人口減少が著しいと聞いています。佐藤さんは今後の小樽についてどのようにお考えでしょうか。

佐藤さん：まずは若い人を中心に、かつて勢いがあった小樽がどうして衰退してしまったのか、またどうしたら現在の人口減少などの問題を食い止め、小樽を活気のあるまちに発展させられるのかを考える必要がありますね。そして観光だけに頼らないまちづくりをしていく必要があります。小樽の観光は歴史があって、まち並みや雰囲気に大きな魅力がありますが、観光はどうしても一過性のものですからね。小樽には若者が働けるような大きな企業がありません。工場に限らずIT関係の会社など小樽の若者が働けるような環境を作らなければなりませんね。そうすることで人口増加の期待ができ、活気あるまちになっていくのではないでしょうか。

まとめ

―この記事を作成するにあたり、佐藤さんには3度もインタビューに応じていただき、訪問する度に私たちを優しく歓迎してくださったことがとても印象深い。インタビューを通して感じた、佐藤さんの「自分たちのまちのことは自分たちで考える」という姿勢から、今後の小樽のまちづくりの鍵が見えてくるのではないかと思う。

インタビューの様子。

チーム08
金野 真由子・齊藤 大希・齋藤 穂夏・齋藤 優太

戦争の記憶の発掘と継承

鴫谷（しぎたに） 節夫（せつお） さん

戦争を語り継ぐ小樽市民の会 代表

プロフィール

昭和11（1936）年、岡山県生まれ。広島大学教育学部卒。倶知安農高や小樽桜陽高、余市高で国語科の教員を務める。同60年、桜陽高在任中に教師仲間と共に「いつまでも戦争を忘れない小樽教師の会」を結成。同年、第1回おたる平和展を開催。同62年、『小樽の戦争　証言・資料集』を刊行。平成2（1990）年、「戦争を語り継ぐ小樽市民の会」、結成。同41年以来毎年開催されている、仁木町での中国人殉難者全道慰霊祭に1回目から参加。慰霊祭実行委員会事務局長、日中友好協会北海道支部連合会長。

小樽空襲、そして終戦から73年。戦争の記憶を持つ人の数は段々と減少している。そのような現在、私たちはおたる平和展を開催するなど、戦争の記憶の発掘と継承活動に尽力し続けている鴫谷節夫さんにお話を伺った。

岡山県出身、北海道で教員に

—北海道に来た経緯を教えてください。

鴫谷さん：北海道は憧れの地でしたね。石坂洋次郎原作の『若い人』という映画、それから小説でいうと小林多喜二の『蟹工船』。そういった北海道が舞台の作品を通して北海道で教員になれたらいいなと思っていました。私の出身は岡山県の古い歴史のある地域でしたが、封建的な社会というかんじが嫌で北海道に飛び出していけば自由にやれるのではないか。そういう思いもありました。大学4年生の時に東京で北海道の教員採用試験を受けて合格しました。

『小樽の戦争 証言・資料集』について

—どうして小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の特攻隊員の資料集を刊行しようと思ったのですか？

鴫谷さん：特攻隊員というのは、戦争中は神に祀られる存在だったのに、戦争が終わると世間の風潮はガラリと変わって冷たい目で見られてしまいました。しかし、小樽高商の先生方は苦労して資料を集め、亡くなった特攻隊員の記念誌を作りあげた。そして出来上がったものを隊員の遺族に直接届けた。私はとても感心しました。私も小樽の戦争の記録を残しておきたいと思い、自分たちで資料集をつくることにしました。

「おたる平和展」について

—どうして「おたる平和展」を立ち上げようと思ったのですか？

鴫谷さん：小樽の空襲について調査している人が本当にいなかったんですよ。そこで、「いつまでも戦争を忘れない小樽教師の会」というのを作りました。私がとにかく調べて記録を残そうと思ったのです。戦死者の友達や同期生が一生懸命に昔の資料を探し出してくれて、そういう動きに感動しましたね。これは世に出さなくてはならない、と思ったのが平和展をずっと続けていくきっかけになったと思います。小樽商科大学の出身者にも戦争で亡くなった方がたくさんいたということに気が付いて、小樽商科大学には慰霊塔があり、追悼式も毎年やっていて、大した先生方がいるものだと思いました。

中国人殉難者全道慰霊祭について

—毎年、仁木町で開かれる慰霊祭は、道内における強制連行や強制労働によって犠牲となった中国の人々の慰霊を目的としており、鴫谷さんは第1回から参加し続けています。慰霊祭に参加されたきっかけを教えてください。

鴫谷さん：小樽商大出身で教員をしていた友だちに誘われて、日本中国友好協会小樽支部に入ったのがきっかけです。商大の学長さんは歴代の慰霊祭の世話人をしてくださっています。

慰霊祭の意義とは

—鴫谷さんが考える慰霊祭の意義とは何ですか？

鴫谷さん：私が考えに考えて行き着いた結論は、これは中国のためにやるんじゃない、日本人自身のためなんだと。日本人は中国への侵略戦争で道義的な信頼を失っているんですよ。だから僕はこの慰霊祭はささやかであってもそういう償いとして、日本人の道義的な再生という課題なんだと考えました。中国の文化大革命の影響もあって、参加者がかなり減って大変な時期もありましたが、周りの人たちが私の考えた意義というものを評価してくれたので、それが続けていく力になりましたね。最近は中国の方々も熱心に慰霊祭に来てくれますし、相手があることだから続けていかなくてはいけないとも思います。

戦争の記憶の継承

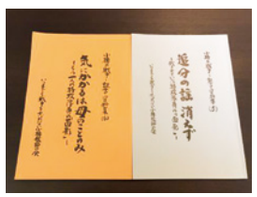
—最後に、鴫谷さんは戦争の記憶をどのように若い世代へ継承していくべきだとお考えですか？

鴫谷さん：これは非常に難しい問題ですが、日本国と日本国民が自分たちの歴史というものを忘れたら、僕は国民ではなくなると思う、それは絶対に言える。このいわゆる「亡国」には2つの要素があって、1つは「精神・文化的」なもの、もう1つは「経済的」なものなんです。だから、たとえ経済的に繁栄していても、自分の国の過去の歴史、そして、民族・国家がよって立つところの基盤、そういうものを忘れた国民は、「文化的な亡国」だと思います。だから、とにかく国民全体が意識して考えていかないと駄目だね。

戦争はただ、たくさんの命が失われ、悲惨な死に方をしたとかっていう、そういう現象ではないんです。もっと人間の本質に迫ったものが、戦争の中にあると私は思っています。我々人間は、どれだけ医学が進んでも、どれだけ優れた人間が生まれようとも、寿命は超えられないでしょう。いつかは死んでしまう存在ですよね。動物の一部でしかない。そういうこともひっくるめて自分たちのありよう、あり方というのをしっかりと考えないといけないと考えています。

まとめ

—インタビューを通じて、鴫谷さんはとても使命感の強い人物だと感じた。また、小樽空襲や中国人と関わりのある慰霊祭、そして鴫谷さんと商大との繋りを知ることができた。鴫谷さんの努力を見習い、私たちは戦争や強制連行を日本国民として決して忘れることなく、記憶を継承していかなければならないことを痛感した。



鴫谷さんが編纂した『小樽の戦争 証言・資料集』。昭和63年から平成3年にかけて9集が刊行された。

緑丘戦没者慰霊塔の中で碑の説明をしていただいた。

資料集を読んだ方から寄せられた手紙。

インタビューの様子。

『小樽の戦争 証言・資料集』

第1集『子どもの見た小樽の空襲と米軍上陸』（1987年）
第2集『十六歳の予科練』（1988年）
第3集『小樽防空監視隊本部女子隊員の記録』（1988年）
第4集『昭和二十年七月十五日の小樽』（1988年）
第5集『追分の謡消えず』（1988年）
第6集『気にかかるは母のことのみ もう一人の特攻隊員の「面影」』（1989年）
第7集『裸燈』（一原有徳・著、1990年）
第8集『ソ連軍に抑留された少年兵 小樽水産学校から陸軍特幹へ』（1990年）
第9集『戦争加害責任を果たすために 2047名の死者を出した北海道の中国人強制連行』（1991年）

チーム09
佐々木 真捺・佐々木 みなみ・笹山 もえ・佐藤 優希

手宮の居酒屋とまちづくり

嶋影（しまかげ） 良彌（よしや）さん

有限会社嶋影商店

プロフィール

昭和22（1947）年、小樽市生まれ。手宮小学校、石山中学校、小樽緑陵高校（現・小樽商業高校）、小樽商科大学短期大学部卒業。中学時代は放送部、高校時代は弓道部。嶋影商店の二代目。35年前、35歳の時にお店を継ぐ。平成2（1990）年、地酒専門店に特化。同11年、ざっかす島影オリジナルの純米吟醸、「おたる島影」と「手宮しまかげ」を発売。同19年に始まった手宮夜桜ライブの実行委員長務める（同28年に10回目で終了）など、手宮から小樽の魅力を発信し続けている。

私たちは、小樽の錦町にある「ざっかす島影」を訪問させていただき、同商店の歴史や店主の嶋影良彌さんの生い立ちなどについてインタビューをさせていただいた。

嶋影商店の創業から現在まで

—創業の経緯を教えてください。

嶋影さん：浜稼ぎの人々をお客として、当初は酒、味噌、醤油、たわしなどを販売する雑貨屋として経営していました。当時は量り売りで、もっきりの文化がありました。もっきりとはお客さんが5合頼んだ時に4合入れて1合はその場で飲むというものです。しかし車社会の到来により、衰退していきましたね。

商品の仕入れについて

—商品はどのように仕入れているのですか？

嶋影さん：蔵元から直接仕入れたり、問屋から卸してもらったりしています。直接仕入れている蔵元は岩手、福島、新潟、長野、鳥取、大阪、北九州にあります。およそ200種の酒を取り扱い、販売しています。

お客さんの層について

—主にどのようなお客さんがきているのですか？

嶋影さん：地元の手宮の方が4分の1、地元以外の小樽の方が4分の1、札幌の方が4分の1。そして、本州からのお客さんが4分の1です。本州からの方は、旅行客というよりは、北海道一周の旅などをしている、いわゆる「旅人」です。そのような方は、ネットの口コミや、宿で他の宿泊客から勧められて来ています。20代から80代と幅広い年齢層の方に来てもらっています。

店のポリシーとは

—この店のポリシーはなんですか？

嶋影さん：ざっかす島影ではたくさんの日本酒をそろえています。日本酒は、地域の郷土料理の味に合うように作られています。例えば、青森・新潟は塩、秋田は醤油、土佐はかつおのたたき、石川・鳥取・島根は酢に合う日本酒が作られています。その日本酒の深いところを知ってもらい、日本の食文化に合わせた日本酒を飲んでもらいたいですね。特に若者に日本の文化を感じてほしいです。

祖先のルーツ

—ご先祖の出身はどちらですか？

嶋影さん：ご先祖は長岡藩（新潟）の出身なのではないかと、この前、毎日新聞の記者が教えてくれました。長岡藩のある地域に「嶋影」という名前のお墓がたくさんあるらしくて、そう思ったとのことです。祖父の代になって北海道に商売の活路を見出し、移住しました。最初は当別で商売をしていましたが、その後、浜益を経て小樽へやってきました。

子どもが多かった時代

—どのような環境で育ったのですか？

嶋影さん：戦後の生まれだったので子供がすごくたくさんいました。1クラス約60人くらいでしたよ。人が多すぎるので当時の手宮小学校では二部授業が行われていて、低学年がお昼まで授業を行い、その後に中学年の授業を行っていました。中学生の時に大きな火事があり、いくつかの学校が被害にあって周りの学校に行くことになりました。子供が多かったので教室が足りなくなり、体育館も特別教室も使って授業をしていました。

手宮、小樽の活性化のために

—手宮の夜桜ライブや利き酒の会はどのような目的で始めたのですか？

嶋影さん：手宮に人を集め、活性化させたいというのが第一ですね。夜桜ライブという名前ですが、励ましの坂の上が栗林の北限でして、手宮公園は桜よりも栗林の名所だと思っています。毎年2月に、手宮の会館で「利き酒の会」を開いています。今年でもう18年目となりますので、20周年まではやりたいですね。この会は、若者に低価格でお酒を飲んで、日本酒に興味を持ってもらい、日本文化について知ってもらいたいというのが目的です。

小樽らしさとは

—嶋影さんにとって「小樽らしさ」とはなんですか？

嶋影さん：日本は戦争による空襲で各地が被災していますが、小樽には明治後期から大正にかけての古いまち並みが今も残っています。戦時中も小樽は山と海の距離が近く空襲を受けにくい地形をしていたため比較的爆撃を免れることができ、石造りの倉庫などが残りました。今ではそのまち並みが大正ロマンの雰囲気を持っていて、小樽の観光を支えています。

今後の小樽に期待すること

—今後の小樽にはどのようなことを期待していますか？

嶋影さん：今の小樽の観光は点になっていると思います。ですから点ではなく線になってほしいですね。例えば、天狗山の夜景など綺麗ですから、山と海をつなぐ交通手段を確立させてほしい。また、手宮線は北海道開拓の原点だから、そこをアピールしたいですね。手宮～色内間に汽車が走ってほしいです。

まとめ

—今回のインタビューを通して、生まれてからずっと小樽に住んでいる嶋影さんが見てきた小樽のリアルな話を聞くことができ、小樽の歴史、特に戦後の子どもが多かった時期についてよく理解することができた。また、日本の日本酒の文化の奥深さも知ることができ、日本酒がその地域の料理に密接に結び付きながら作られてきたことがわかった。今後、この経験をもとに小樽の活性化に関わっている人々やイベントなどにも目を向け、自分たちも積極的にかかわっていきたいと思う。

お店でのインタビューの様子。

オリジナル純米吟醸。

お店の外観。

チーム10
沢田 誠斗・島川 大輝・島田 ニコラ・島田 美紅

花園の中華店

鈴木（すずき） 幸安（ゆきやす）さん

華舟 店主

プロフィール

昭和24（1949）年12月9日生まれ。北海道芦別市出身。花園の中華料理店、華舟の店主。以前、寿司屋で修行していたが、会席料理の中華料理を見てそれを習ってから中華の道に進むことを決意。札幌、小樽で中華料理店で腕を磨き、同60年に華舟を開店。修行時代は、あんかけ焼そばを小樽に広めたと言われる梅月で働いていた。現在、公益社団法人日本中国料理協会小樽支部の支部長を経て、現在は相談役。

私たちは、小樽にあんかけ焼そばを広めたと言われる、名店「梅月」で腕を磨き、その後、中華料理店「華舟」を開店し、数々の賞を受賞するなど多方面にわたって活躍する中華料理人の鈴木幸安さんにお話を伺った。

生い立ちとは

—どちらでお生まれになったのでしょうか？

鈴木さん：私は北海道芦別市出身で、もともとは上富良野町の寿司屋で修行をしていました。そして、5年後に寿司屋の親方に「別のところにも行ってこい」と言われました。その時、寿司だけでなく宴会などで使う中華料理もいいじゃないか、ということで札幌の中華料理屋を探しました。そこで、和食と中華が一緒の調理場で働けるところがあり、中華料理を学びました。そこで培った技術をもっと開花させたいと思って、中華の道に進むことに決めたんですよ。昭和47年から小樽の梅月で働き始めました。その後、同55年12月に独立を決め、住ノ江町で華舟を開業しました。その29年後に花園で店を開かないかという話があり、小樽の花園へ店を移しました。これがいまのお店です。

寿司の世界から中華の世界へ

—なぜ寿司屋から中華料理の道へ進むことになったのですか？

鈴木さん：学校を中退して最初に勤めたのが上富良野町の寿司屋でした。勤めて5年経ったときに別の所へ修業してこいと言われて、札幌の和食と中華が一緒になった調理場を見つけて働き始めました。しばらくして、札幌の大きな調理場で技術を培ったのにこのまま田舎へ帰ってもいいのかということを自分の中ですごく迷いました。だって、ここで見たこともないような色々な料理を見てそれが頭に焼き付いているわけでしょう。それならいっそ少し道は逸れてしまったけど、中華の道で花を咲かそうかなと。中華料理ってのはいろんな素材、例えばイカ1杯でも100種類、それ以上にも作れるわです。そういう意味でも中華がいいと思って、その旨を店のチーフに伝えたら「まだ寿司屋の親父と3年修行するって約束なのに、1年半ぐらいで辞めるなんて」と言われて怒られたんだけどね（笑）。でも自分の気持ちも変わらなかったし、そのチーフも理解してくれて店探しも手伝ってくれました。小樽の梅月という店を見つけてくれたんだよ。寿司屋の親父も「お前が中華を習ったからって俺と縁が切れるんじゃなくて、こっちへ来るときは色々教えてくれよ」ってね。

今と昔の中華料理の違い

—今と昔の中華料理で変わったと思う点はありますか？

鈴木さん：それはあるよね。昔、中華料理といったら中国から貰ってきたものを我々が見て、習って作っていたけれど、今は中華料理といったらどんなものか大体決まってしまっています。だから今度はどうするかというと、和食や洋食を中華風の視点で見て「こういうのもいいな」と思ったら取り入れたり、それらの調味料なんかも「この料理に混ぜたらどうなるかな？」と考えたりしています。

現在の中華料理の世界とは

—料理の種類の垣根を越えて、ということでしょうか？

鈴木さん：そうだね。色々な技術や調味料、見て綺麗だと思ったものは〇〇料理といった垣根にとらわれずに取り入れて、自分なりにアレンジしています。

今は中華料理そのものが世界に広まっています。以前は、北海道だけで大会が行われていたけど、今は日本中に広まって、アジア圏にもいって世界大会も開催されるようになった。小樽からも若い人が行って金賞も取っています。

仕込みに時間のかかる仕事を若い人に教えられないというジレンマがあります。例えば、「鯉の丸揚げ」という料理があるのですが、今の若い人はあまり見たことがないかもしれませんね。ゆっくり時間をかけて完成する料理だから、こういう長い仕込みの仕事を若い人に伝えられないのは問題ですね。

小樽での活動

—小樽に来てからどのような活動をなさっていますか？

鈴木さん：梅月で修業を続けているうちに、そろそろ自分でも独立できるかなと思って、昭和55年12月に小樽の住ノ江町で「華舟」を開業しました。ここ花園に移ってからもを含め、トータルで35～36年は小樽にいます。

そんなに長年、小樽にいる間、我々調理師もI年の行事の一環として施設慰問を行ったり、B－1グルメの全国大会に出場したり、料理の講習会を開いたりと市民の方々に還元しています。

「華舟」命名の由来

—店名を「華舟」とした理由を教えてください。

鈴木さん：結局、自分の夢というのは、小さな川から笹の葉が流れて、最後には大きな海へ出るという構想なんだよね。当初は「華」ではなく「花」だったんだけど、字数占い的に「華」の方が良かったんです。それに、「船」ではなく、「舟」にした理由としては、「船」よりも「舟」の方が「華」と並んだ時にバランスがとれているから。名前が適正かどうかは、字数を占った際に「これは良いですよ」って言われてその気になったからだよ（笑）。

小樽あんかけ焼そば親衛隊について

—小樽あんかけ焼そば親衛隊に加盟されたことの意義はどのようなものでしょうか？

鈴木さん：小樽はあんかけ焼そばの発祥の地ではないけど、小樽で普通に食べられている料理として広めたいと思ったんだよ。以前、小樽商科大学の江頭先生に小樽あんかけ焼そば親衛隊の会長になっていただいていました。B－1グルメに出場したり、全国の方々に知ってもらおうとチャレンジしています。

あんかけ焼そば。

お店の外観。

厨房の様子。

店内の様子。

チーム11
杉本 亜実・高橋 佑奈・髙山 大輝・竹内 一生

観光都市・小樽のはじまりの頃

田宮 昌明（たみや まさあき）さん

元小樽市職員

プロフィール

昭和32（1957）年、小樽市梅ヶ枝町生まれ。小樽潮陵高校を卒業後、関西学院大学へ進学。同大学を卒業後、小樽潮陵高校で1年間、非常勤講師を勤める。その後、道外で生活した経験から小樽の魅力を再認識し、小樽に貢献したいと思い、小樽市役所職員となる。一市民としてオタル・サマーフェスティバル、小樽がらす市、小樽運河クリーンプロジェクトなどに、市職員として小樽商科大学の授業「本気プロ」など、小樽のまちづくり活動に関わる。小樽市立病院、観光振興室、秘書課などに勤務し、平成29（2017）年に市役所退職後、現在は小樽水産加工業協同組合に専務理事として勤務している。

私たちは、小樽市役所職員として様々なまちづくりイベントに関わってきた田宮昌明さんにインタビューを実施した。田宮さんは、オタル・サマーフェスティバルなど、小樽のイベントを中心にまちづくり活動に大きく貢献しており、興味深いお話を伺うことが出来た。

小樽市役所へ勤務するきっかけとは

―田宮さんが小樽市役所に勤めたきっかけは何ですか？また実際に勤めて感じたことは何ですか？

田宮さん：最初は教員志望でしたが、両親とともに実家の魚屋を継いでいた姉が癌のため余命わずかとわかったため、親の面倒を見なければならないと思ったことと、元々小樽が好きでしたが小樽を離れるとなおさら小樽の良さがわかって小樽で働きたくなったんですよ。小樽は田舎の度合いと都会的な度合いが絶妙なんですよね。山や海の自然に囲まれて、坂や歴史的建造物が多くある独特なまち並みがあずましく感じました。小樽に住んでいる人は当たり前と思うかもしれないけど、一度外に出て戻ってくるとわかりました。そして、民間で利潤を追求するよりも自分の好きな小樽のために多少なりとも貢献したいと思いました。市役所に勤めてからも一市民としてまちづくりに関わることで、小樽についていろいろと知ることもできましたし、人のネットワークもできました。

小樽の観光都市化までの変遷とは

―ちょうど田宮さんが市役所に勤め始めた頃、小樽は観光都市になっていきましたが、どのようにして観光都市になっていったのでしょうか？

田宮さん：元々、小樽は商工港湾都市という認識がメインでした。私が観光課にいた昭和62年～平成4年（1987－1992）は、小樽観光が飛躍的に伸びた時期でした。きっかけは、「運河論争」です。保存か埋め立てかで10年余り激しい論争が続いた小樽運河。小樽市民を二分した論争は、市議会でもつかみ合いの紛糾状態になったり、市長のリコール運動にまで発展し、全国ニュースとして大きく取り上げられていました。昭和61年に運河が現在の姿になり、「あれだけ論争の続いた小樽がこんな風に変わりました」という報道がなされました。その頃、バブルで日本中が賑わっていたこともあり、多くの観光客が小樽に来ました。すると投資が生まれ、急速に観光業が発展し、一気に全国的な観光都市となっていきました。その当時、小樽市が発行していた観光パンフレットなど宣伝物の予算も4倍くらいになり、ロマンチック感を全面に押し出したPR活動も小樽の観光都市化に拍車をかけましたね。今では道外の方々や、多くの外国人に小樽を認知してもらっていて嬉しく思います。しかしその頃でさえ、観光という分野は経済活性化の起爆剤くらいの認識でしかありませんでした。

オタル・サマーフェスティバルとは

―田宮さんはいろいろな小樽のまちづくりイベントに関わってこられました。オタル・サマーフェスティバルとはどのようなものだったのでしょうか？

田宮さん：小樽運河が新しく生まれ変わった年に始まったイベントで、歴史的建造物をライトアップし、それをバックにビールやワインを飲みながらジャズなどの演奏を楽しんでもらうものでした。

オタル・サマーフェスティバルの目的とは

―オタル・サマーフェスティバルの目的や大変だったことについて教えてください。

田宮さん：目的は二つありました。一つは小樽の人に小樽のまち並みの良さを知ってもらうこと。そのためにいつもと違うまち並みの表情を見せるため、歴史的建造物をライトアップしたわけです。もう一つは、運河が新しく生まれ変わったので、埋め立てを推進してきた行政と経済界の人たちが主体となっていた「おたる潮まつり」と、運河保存運動に関わっていた若者たちが始めた「ポートフェスティバル・イン・オタル」をつなげて、日本一長いお祭りにしようという目的がありました。

大変だったことは、平日の月曜日から木曜日もしくは金曜日までの開催だったことですね。しかも、16時から道路を通行止めにして準備を始め、18時にイベントをスタートさせ、21時に終了後、会場内の片付けを行い、23時には何事もなかったかのように車が通る。毎日がこの繰り返し。設営や警備などのボランティアスタッフを確保することが大変でした。私が運営スタッフとして関わっていく中で、市役所の後輩たちも徐々に参加してくれ、最初は少ない人数でしたが、最後は40～50名にまでなったことが印象的ですね（笑）。その他にも多くの小樽の人の助けを借りて成功することができました。小樽商大のジャズ研の人たちも参加してくれていたんですよ。

観光都市としての小樽の今後について

―今後の小樽観光についてどう思いますか？

田宮さん：小樽全体で考えたとき、経済の活性化や福祉の充実などいろいろなことを進めていくためには、人もお金も必要です。財源が限られている中で何にどれだけ人とお金を手立てするのかがポイントだと思います。しかし、ただ手立てするだけではなくそれによってお金を生み出していくことも大切だと思います。現在、小樽市において観光は基幹産業です。観光分野にもっと人とお金を投入することで観光客による経済波及効果が高まっていくと思います。

まとめ

―このインタビューを通して、田宮さんは小樽というまちの特性を活かす上で、人とのつながりをとても大切にして、小樽市役所職員として尽力されていたことがわかった。市役所を退職して立場が変わってからも、様々なイベントに関わり小樽のまちづくりに貢献していた。私たちは小樽を身近に感じすぎているあまり、小樽の魅力や現状に気付けていないことがわかった。私たちは当たり前のことを当たり前で終わらせず違う視点を持って小樽の魅力を伝えていきたい。田宮さんをはじめとして多くの人が作り上げた観光都市・小樽を守り続けるためにも、私たち若い世代が田宮さんのように人とのつながりを重視していくことが必要だと強く感じた。

第８回サマーフェスティバルの様子。（1993年）

インタビューの様子。

チーム12
武田 隼貴・伊達 晋人・田中 大貴・田巻 俊亮

小樽の歴史文化と観光

土屋（つちや） 周三（しゅうぞう）さん

元小樽市総合博物館 館長
北海道北前船調査会 主宰

プロフィール

昭和23（1948）年、北海道厚真町出身。国士舘大学文学部卒業。後志管内泊村社会教育主事を経て、同49年、小樽市博物館の学芸員として着任。平成12（2000）年、同館長に就任。同16年、ニュージーランドの姉妹都市であるダニーデン市との交流活動が評価され、メリット勲章を受賞。同19年、科学館を統合した小樽市総合博物館館長に就任。同21年に博物館を退職後、北海道北前船調査会を主催し、講演会などを通して小樽の歴史文化の魅力を紹介している。

私たちは、元小樽市総合博物館館長で、現在、北海道北前船調査会を主宰している土屋周三さんにインタビューを行った。土屋さんは学芸員として小樽に着任した当初、小樽の人たちは地元に対する意識が希薄だと感じたという。しかし、それが土屋さんの学芸員としての「やりがい」をより強めることになった。そして学芸員として小樽を見ていくうちに、小樽の発展には小樽と本州をつないでいた北前船の存在があることを理解するようになったという。

北前船の役割

―北前船というのは、かつて北海道と本州を結ぶ物資運搬船だったと聞きましたが、具体的にどのような船だったのですか？

土屋さん：そもそも、北前船というのは江戸時代と明治時代では役割が違います。江戸時代には、積丹半島を越えて小樽や銭函、厚田、留萌方面の水産物を出荷するために北前船が使われていました。最初はそれだけでよかったのですが、安政2（1855）年12月から積丹半島以北への婦女子の自由往来が認められるようになって、人口が増え生活物資も運ぶ必要が出てきました。そして、明治時代になると開拓が進み、さらに人口が急増してきて、その分北前船は北海道に住む人たちすべての生活物資を運ぶことになりました。だから、北前船の一番の功績は北海道開拓と言えるかもしれません。そんな北前船の素晴らしい活躍を知ってほしいと思って、北海道北前船調査会を始めました。

現在に至るまでの小樽の変遷

―小樽はかつて金融のまちでもあり経済都市でしたが、今は観光地化しています。どうしてそのように変化したのでしょうか？

土屋さん：小樽の歴史を遡ると、明治期に銀行がどんどん出来ていきましたが、時代が変わって第二次大戦に入ってしまうと政府の金融政策などがあって銀行統合や、敗戦の負債処理などで小樽に集まった銀行がどんどん撤収していきました。そうすると建物だけが残ります。本来なら資金があれば改築ができるのですが、小樽はその頃、それだけの資金力を失っていました。だから倉庫も銀行も放っておかれたんですよ。だからある意味で、「貧乏の産物」とも言えますね。でも、それらには一種独特なノスタルジーが残っていて、現在では小樽の魅力になっていると思います。

小樽の魅力とは

―小樽の魅力について土屋さんの活動から具体的に教えてください。

土屋さん：私が担当していたゼミの生徒たちは、車でどこかへ旅行に行こうという話になると、北広島とか江別に行こうとはなりません。100％小樽に行こうとなります。それは小樽に行って特に何かしたいことがあるわけではないんですよね。それが観光都市としての小樽の財産です。理由なんかいらない。理由なんか後でつければいい。それより先に、なんとなく行きたいというイメージ。それが観光の財産です。それが小樽のまちの魅力だと思いますね。

今後の小樽の展望とは

―土屋さんは今後の小樽がどのようになっていってほしいですか？

土屋さん：札幌と小樽の関係が、東京と横浜の関係ではなく、東京と鎌倉の関係になればいいなと思っています。そうすると本当に札幌の方々が小樽に息抜きに来ることができます。そして、小樽に来てブラブラするだけで活力を得ることができる。そういうまちになったらいいなと思っています。

観光都市として小樽に必要なこととは

―そのような小樽が実現するためにはどのようなことが必要ですか？

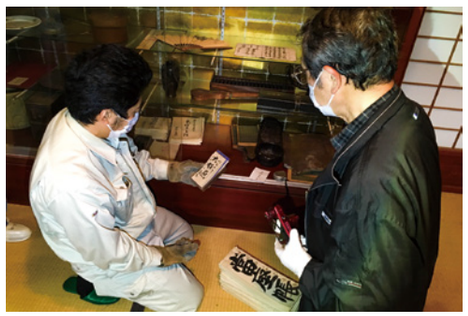
土屋さん：まず小樽の人たちが、「このまちは観光都市なんだ」と自覚しないと始まりません。最近になって観光客への接し方などの質はある程度向上したと思いますが、それでも小樽が観光都市になってからの歴史は短いですからね。そして何より、小樽の人たちは地元の建物に対して当たり前だと思ってしまっていて、特別なものだと認識できていないんです。だから私は、むしろ小樽の外の人たちに小樽の魅力をどんどん発見してもらうことが重要だと思っています。そうすることで、小樽の人たちにも観光地としての自覚が生まれてくるのではないでしょうか。

もう一つ言いますと、風情を醸し出す景観をしっかり保全していくことも大切だと思います。北海道一の経済都市として発展してきた小樽が観光都市として今後生き残っていくためには、地域の人たちがそのことを認識することが大事です。そのためには若い人の知恵、提言が必要になってくると思います。

まとめ

―今回のインタビューで心に強く残ったのは、小樽を活性化させるためには、まず私たち自身が小樽や北海道の歴史を把握し、歴史の中で築き上げてきたそのまちの文化を理解することが大切であるということだ。日常生活の中でごく当たり前のように存在する建物や風習は、小樽の外から訪れる人にとってはとても魅力的な観光資源になると、土屋さんは教えてくださった。小樽の歴史や文化を理解しないと、小樽を活性化させるための一歩を踏み出せないということを私たちは土屋さんのお話から学んだ。

いしかり市民カレッジ「北前船ものがたり」での講演。
（花川コミュニティセンター、2016年10月）



旧小樽倉庫の創設者の一人、西谷庄八邸の資料調査。
（石川県加賀市橋立町、2017年11月）

チーム13
天満 康美・土橋 渉・富田 帆乃花・中尾 ちとせ

小樽のピアニスト

中川 和子（なかがわ かずこ）さん

ピアニスト

プロフィール

昭和30（1955）年、小樽市生まれ。同53年、東京音楽大学卒業後、ウィーン国立音楽大学に入学。卒業後、3年間、研究員としてウィーンで活動後、同59年に帰国。翌年から行われた小樽国際音楽祭に出演。以後、20年にわたって出演した。平成2（1990）年、ファンクラブ「ハンマークラヴィア」設立。小樽では年2回程度、ファンクラブ主催の演奏会に出演している。まちづくり活動にも関わり、小樽の病院や小学校での演奏も行っている。

私たちは、小樽出身のピアニストで、国際的な活動を展開している中川和子さんにインタビューを行った。ウィーンでの留学経験を持ち、現在は小樽を拠点に活動を続けている中川さんに、小樽での活動や小樽のまちの魅力について伺った。

生い立ちとピアノとの出会いとは

—中川さんの生い立ちとピアノとの出会いについてお聞かせください。

中川さん：私は小樽生まれで、昔は水天宮の下にある家に住んでいました。子供の頃、一緒に遊んでいた友達の家に立派なピアノがあり、弾かせてもらったのがはじまりです。その後も、友達に簡単な手解きを受けたりしているうちに、ピアノにどんどんのめり込んでいきました。

東京へ進学した理由とは

—札幌の藤女子中学校・高等学校に通われていましたが、大学は東京に行こうと思ったきっかけは何でしょうか？

中川さん：周りの人たちにも東京進学希望が多かったため、比較的考えやすかったということと、高校時代から演奏家になれたらいいなという思いがあり、大学でもピアノを続けたかったことです。両親を説得するのは大変でしたが（笑）。

ウィーンへの留学

—大学卒業後、ウィーンへ留学した経緯について教えてください。

中川さん：やはり、昔から留学や西洋音楽に憧れがあったのと、大学在学中にウィーンから来日した先生の指導を受けて、より行きたくなりました。でも、日本の大学は卒業したかったので先に卒業を優先して卒業後すぐに渡欧し、10月頃に行われた入学試験にも無事合格して入学できました。

留学中の生活

—留学中の大学生活はいかがでしたか？

中川さん：ウィーン国立音楽大学は8年生までであり、外国から来た人は2年間のドイツ語の勉強をしなくてはなりません。8年もいられないと考えていたので、飛び級制度を利用して3年間で卒業しました。後から分かったのですが、当時、北海道から留学して卒業したのは私が初めてだったようです。その後も、通訳の仕事などをしながら研究員として3年間生活していました。私の住むアパートでは8時以降にピアノを弾く事を禁止する決まりがあったため、8時以降は近くで行われるピアノやオペラなどの演奏会、コンサートにほぼ毎日といっていいほど通っていました。というのも、学生料金だったこともあり、有名な演奏家の演奏が100円から120円くらいで聞けることもありました。多くの音楽に触れることで、世界が広がったように感じました。

帰国のきっかけとその後の活動とは

—6年間のウィーンでの生活の後、昭和59（1984）年に帰国されていますが、なぜこの時期だったのでしょうか？

中川さん：帰国の理由はビザの期限が切れたことや色々なことがあったのですが、その一つに、小樽国際音楽祭への出演オファーがありました。ドイツなどからピアノやヴァイオリンの演奏家にボランティアで出演してもらう音楽祭で、彼らとの演奏は印象に残るものばかりでした。その後、様々な困難もありましたが何とか20年続けることが出来ました。ここで出来たつながりは大切なもので、特にヴァイオリニストのヤノシュ・マテさんとは今もデュオで演奏会をしています。ファンクラブの設立も実は小樽国際音楽祭のつながりがきっかけです。

ファンクラブの設立と活動

—平成2（1990）年にファンクラブ「ハンマークラヴィア」が設立されていますが、どのような経緯だったのでしょうか？

中川さん：ある時、電話がかかってきて出てみると、いきなり「中川和子さんのファンクラブを作っていいですか？」と言われてびっくりしました。後日会って分かったのですが、その方は小樽国際音楽祭のスタッフだったのです。彼女の説明する活動内容は、小樽で年1～2回行うファンクラブ主催の演奏会への出演で、その他は小樽にいなくても大丈夫というものでした。どこで活動するか考えていた時にお誘をいただいたので嬉しく承諾させていただき、ファンクラブ「ハンマークラヴィア」が設立されました。この演奏会は今年で27回目になり今も続いています。そのチケット料金にある願いがあって、大人は発足当初から変わらず3千円で高校生以下は無料です。なぜなら、子供たちが演奏を聴いて少しでも音楽に興味をもってほしいというのが一つと、その子たちが大人になって今度は自分でチケットを買い求めて、いろいろな演奏会を聴きに来てほしいからです。

そして派生的に生まれたのが「ハンマークラヴィア北海道」で、こちらは小樽、札幌、興部、厚真に事務局があるファンクラブで、全国各地でボランティア演奏を行っています。

小樽はつながりのまち

—演奏会はホールに限らず、病院や小学校でも行なっていますが、どうしてこういった場所でも演奏をしようと思ったのですか？

中川さん：市立病院での演奏は、これもまた音楽祭の関係者に看護師さんがいて、そのつながりで演奏するようになりました。私は小樽のまちづくり団体、小樽市民会議にも所属しており、そこからのオファーで小樽市内の小学校などで演奏をしています。いま思えば、すべては音楽祭から始まっているように感じますね。小樽という小さなまちだからこそいい距離感で人と交わることが出来て、そのつながりはいまも続いています。積極的で行動力があって、個性的な方が多くて、とても刺激を受けました。でも、そんな皆さんとのつながりは本当に大切なもので、感謝しています。

まとめ

—今回の取材を通して中川さんの小樽への感謝の思いが強く感じられた。現在も勉強中だという中川さんの強い探求心と向上心のたまものである演奏会に足を運んでみたいと思う。

第一回小樽国際音楽祭（1985年）のチケット。

演奏を聴かせてくださいました。

インタビューの様子。

チーム14
中川 幸英・中田 詩音・長橋 椎矢・奈良 知実

小樽名物、花園だんごの誕生

新倉（にいくら） 吉晴（よしはる）さん

株式会社新倉屋 代表取締社長

プロフィール

昭和16（1941）年12月15日、小樽市生まれ。小樽潮陵高校54期生。学習院大学卒業。山型一刀流の餡の盛り付け方で知られる「花園だんご」で有名な新倉屋を経営。菓子に対する強いこだわりを持っており、特に小樽の名物となっている花園だんごには人一倍の情熱を注いでいる。平成27（2015）年度の小樽市功労者（経済産業部門）となる。

小樽のお店にどんなイメージを持っているだろうか。伝統という言葉が思い浮かぶ人も多いのではないだろうか。私たちは、明治28（1895）年に食糧品雑貨商の丸サ大阪屋として創業以来、現在まで123年続く菓匠・新倉屋の代表取締役社長である新倉吉晴さんにお話を伺った。

お店の変遷とは

―雑貨屋だった「丸サ大阪屋」からお団子屋さんに転身したきっかけはなんだったのでしょうか？

新倉さん：昭和11（1936）年に団子屋で働く方と一緒に仕事したことがきっかけだったようです。昔、小樽にはたくさんの団子屋がありましたが、第二次世界大戦の時に原材料である米が手に入らず、休業を余儀なくされました。その後、私が小学4年生の時に冬だけ団子づくりを再開し、高校生の時には一年中、団子を作れるようになったんです。戦後、数店舗が団子屋を再開しましたが、今も営業しているのはうちだけですね。

山型一刀流とは

―新倉屋といえば山型一刀流という餡の載せ方が有名ですが、どのようにして誕生したのでしょうか？

新倉さん：「せっかくなら品格ある団子を」と、先代の新倉慎太郎が考えたのです。その時に、贈答品としても使えるようにと見た目を工夫し、格好よく洋食ナイフで流線形に餡をつけてみたところ、それが山の形をしていることから山型一刀流と名付けました。団子という庶民的な食べ物が少し格好よく見えるでしょう？

大学進学までについて

―先程、話題になった新倉さんの学生時代、小樽はどのような町だったのでしょうか？

新倉さん：私は昭和16年12月、太平洋戦争開戦の7日後に生まれました。新制小学校になってから2年目に稲穂小学校に入学し、中学校は菁園中学校で、小樽潮陵高校に進学しました。中学校も高校も通っている期間に火災が起こりました。昔は珍しいことではありませんでしたが、仮設校舎に通ってました。高校卒業後は東京の学習院大学に進学し、初めて小樽から出ました。

家業を継ぐことについて

―大学で東京に出た時、家業を継ぐ他に何か夢はなかったのですか？

新倉さん：なかったですね。私は長男で兄弟は妹が2人だったから、物心ついた時からずっと将来は新倉屋を継ぐと思って育ったので、継ぐことが当たり前でしたね。それが嫌だと思ったこともないですよ。

長く続けてこられた秘訣とは

―大学卒業後、小樽に帰ってきてからずっと新倉屋でお仕事をされていますが、長く続けてこられたのはなぜでしょうか？

新倉さん：団子屋などの飲食店というのは「商い」です。「商い」は、「飽きない」でやることが大切だと思っています。毎日同じ時間にお店を開け、来てもらったお客さんに満足してもらう。お客さんに「美味しい」と言ってもらうとやりがいを感じます。人に喜びを提供できるこの仕事は、楽しいことはあっても、嫌なことはないと思っています。だからずっと続けられたのかもしれません。

菓子屋として認められるために

―新倉屋と小樽の関わりについて教えてください。以前はおたる潮まつりに参加されていましたが、会社と小樽の関わりについて教えてください。

新倉さん：新倉屋が初めて潮まつりに参加したのは31年前です。それから10年くらい梯団を出していました。参加のきっかけは、昔の潮まつりは町内会や夜のお店の女性が踊っていたのに、20回を過ぎてまつりが少しマンネリ化し、踊り手が不足したことです。

あと、私は社長になってから新倉屋を「菓子屋」として人々に認めてもらいたいと思っていました。しかし、それまで団子に特化していたこともあって小樽の人はなかなか菓子屋と認めてくれませんでした。そのため、お祝い返しとかご祝儀でうちの菓子は使ってもらえなかったんです。その状況を打破したかった。そこで、潮まつりで踊りに参加することで少しでも新倉屋を知ってもらおうと思ったんです。参加したことでまちの人が新倉屋には思ったよりも人がいるぞと思ってくれたようです。それからだんだん新倉屋は菓子屋として認知されるようになりました。

今後の会社の展望とは

―今後、新倉屋をどんな会社にしていきたいですか？

新倉さん：一度、中国でやらないかとお誘いをもらったこともあったんです。また、昔は札幌にも店を構えていました。でも、今はこの小樽でいつでも美味しいと言われる団子を作り続けたいと思っています。大切なことは伝統の同じ味を守ることではなく、時代に合う「美味しさ」を守っていくことだと思うので、そこを大切にしながら愚直に、飽きずにやっていきたいですね。

まとめ

―今回のインタビューを通して、新倉屋は伝統ある会社だが時代に合わせて変化し続けていることが分かった。また、新倉さんの優しい佇まいの裏にある、今までのたくさんの努力、お店にかける情熱やプライドを感じることができた。新倉さんが実質的な代表になったのは30歳の時で、新倉さんの後を継ぐ息子さんは現在29歳。いつ交代するか迷っているとおっしゃっていた。しかし、もし交代の日が訪れても、新倉さんのお店への愛はずっと変わらないだろう。私たちは、いつまでも新倉屋が小樽を愛し、小樽に愛されるお店であり続けることを願っている。

花園だんご。山型一刀流で載せた餡が特徴。

インタビューの様子。

新倉屋 総本舗・本社・工場。

チーム15
鳴海 沙弥香・西懸 真央・西村 陽菜・廣瀬 佑也

詩人のまち小樽

萩原（はぎわら） 貢（みつぎ）さん

小樽詩話会 会員

プロフィール

昭和8（1933）年、小樽市高島生まれ。中学校を卒業後、小樽地方貯金局に就職し、58歳まで勤める。就職して、1～2年後、小樽商業高校定時制に進学。同38年、小樽詩話会の創設に関わる。同53年、「ドアの断崖」で北海道新聞社文学賞佳作。同54年には「悪い夏」で小熊秀雄賞を受賞。最近では、平成15（2013）年に「小さな椅子の鬣」で北海道新聞文学賞を受賞。「潮踊り唄」の作詞者として知られる。

私たちは発足後50年以上経て、今なお続く小樽詩話会の創設者の一人であり、詩の分野で様々な賞を受賞している萩原貢さんにお話を伺った。昭和8（1933）年生まれの萩原さんは、現在も詩の創作活動を続けており、最近では北海道新聞文学賞を受賞されている。おたる潮まつりでおなじみの「潮踊り唄」の作詞を手がけたことでも知られる方である。

詩をつくり始めたきっかけとは

―詩をつくり始めたきっかけは何ですか？

萩原さん：最初は絵を描くのが好きでしたが、中学生の時、祝津にいた友人が油絵の具など当時としては高価な道具を持っていたんですよ。そこで少し劣等感を感じてしまいまして（笑）、このまま絵を描いていくわけにはいかないと思いました。そこで「鉛筆一本で書ける作詩なら」と始めました。また、当時は小説を書きたいと思っていましたが詩の方が敷居を低く感じたこともあり、詩を選びました。

詩のテーマとは

―詩をつくる時に一貫したテーマはありますか？

萩原さん：特にはありませんね。昔は自然をテーマにしていましたが、現在は昔よりも日常にあるものを題材として書くようになりました。それというのも小樽詩話会には様々な人が来ましたので、非日常をテーマにしている自分をふさわしくないと思うようになったんですよ。そういうことがあり、みんなが親しめる日常をテーマにするようにしました。

詩をつくる環境について

―小樽は近くに山も海もあり、そういう意味では詩を作るには適した環境と言えそうですが、いかがですか？

萩原さん：小樽に限らずどこに住んでいても、目の付けどころによっては日常のすべてが題材になると思いますね。

「潮踊り唄」の作詞について

―萩原さんは潮まつりの「潮踊り唄」の作詞をなさったそうですが、どういった経緯で書くことになったのですか？

萩原さん：潮まつりは、当時、小樽のまちが「斜陽」と呼ばれている中、小樽の活性化を目指して新しいまつりを作ろうと企画されました。その中にいた私の幼馴染の米谷祐司さんから「潮踊り唄」の作詞を依頼されました。作詞は初めての試みでしたが、勢いのある曲になるよう、踊りのための詩を精一杯書きました。

今後の潮まつりに期待することとは

―今後の潮まつりはどうあってほしいですか？

萩原さん：私の書いた歌詞が今も残されていることは嬉しく思いますね。しかし、この歌詞は自分のものではないと思っています。その時代を生きる小樽のみんなのものであると思います。ですから、私はこの作品の歌詞は時代とともに移り変わっていいと思っています。まつりというものはその時代ごとの精神を反映するものであると思っていますので、最初に作られたものに縛られずにもっと面白いものがあったり疑問を感じたりすれば、どんどん差し替えていってもいいと思います。

小樽詩話会の運営について

小樽詩話会は昭和38年、文学について自由に話し合える会を作るという趣旨のもとに萩原さんらによって発足した会である。柔軟であるために会則を決めないという方針のもと54年間続いている。

―会則や会長を決めないという方針で長く続けるうちに困ることなどはありませんでしたか？

萩原さん：会長という明確な立場を決めずに話し合いで会を運営するという方針で50年以上続けることができているので、このように決めて良かったと思っています。

また、会の運営には会員のボランティアによる協力が不可欠で、印刷や製本を行ってくれる人がいてくれたから長く続いてきましたが、近年では新しい運営の形態を模索しています。

活動のテーマについて

―小樽詩話会は、お互いに顔の見える関係にこだわっているそうですが、なぜですか。

萩原さん：小樽詩話会のテーマに「小樽のまちに明るく楽しい詩の花々を咲かせる」というものがあるので、小樽で開かれる定例会に参加して欲しいというのが理由です。

現在、小樽詩話会には、北海道内（小樽を除く）に約40名、道外に約20名の会員がいます。そういう方は「顔が見えない関係」に当たるのでしょうが、その中にも定例会に欠かさず来てくださる方もいらっしゃいます。「いつもは例会に来ないけど、年に1回は顔を出す。」という方もいるので、自由に詩を楽しめる会であると思います。

今後の活動について

―今後、小樽詩話会の活動の展望を教えてください。

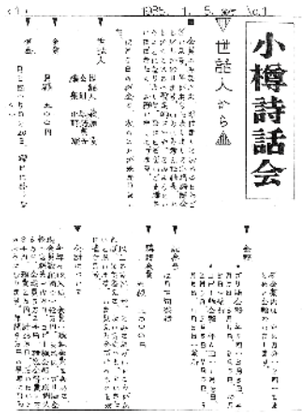
萩原さん：この会は素晴らしいものだと思うので、是非このまま続いて欲しいと思っています。最近は昔ほど景気が良くないことなどもあり、会費が500円から千円に上がりましたし、これから会員を増やすことに積極的になっていくかもしれませんが、一番いい方法を模索しながら続けていければいいですね。

まとめ

―今回のインタビューを通して詩を作ることについての考え方や詩の奥深さ、また小樽と詩の関係の面白さを知ることができた。特に詩の作者でありながら自らの作詞した「潮踊り唄」の歌詞を変えられていくことを望んでいることは印象的であった。萩原さんの「潮まつり」や「潮踊り唄」への考え方は、広い視点でものを見ている詩人ならではのものであると思う。

また、小樽詩話会で小樽のまちの詩人たちと深い関わりを持ち共に高め合い影響しあう関係を続けていく姿は、小樽のまちにとって大きな存在であると言えるだろう。

インタビューの様子。



小樽詩話会 会報。
（1985年1月5日発行）

チーム16
藤島 広大・本間 裕己・前田 凌央・萬谷 槙太郎

朝鮮半島から小樽へ

平田 晴久（ひらた はるひさ）さん

若草企業 創業者
小樽民団 初代団長

プロフィール

大正11（1922）年、朝鮮半島の慶尚北道安東で生まれる。韓国名は「黄 錫圭」。17歳の時に日本に渡り、神戸、大阪、余市町などで生活する。昭和36（1961）年、小樽で民団の初代団長となり、小樽民団の礎を作り、小樽に住む在日韓国人のために現在も活動を続けている。同44年、小樽で若草企業を創業し、パチンコ業や不動産業を経営。

私たちは、朝鮮半島で生まれ、その後、日本で様々な仕事や活動をしてきた平田晴久さんに話を伺った。平田さんは小樽民団の初代団長であり、また、小樽で不動産業等を営む若草企業の創業者である。時代の波や日韓関係の波にのまれず、努力をされ成功を収めた平田さんのお話はとても興味深いものであった。

生い立ちとは

―平田さんのお生まれはどちらですか？

平田さん：私は大正11（1922）年に韓国の慶尚北道の安東というところで「黄 錫圭」という名前で生まれました。日本に来たのは昭和14（1939）年、17歳の時でしたね。石炭船に乗ってきて、最初は神戸に住んでいました。日本では地名の平海の平の字を取って「平田」と名乗りました。日本に来て、まずは炭鉱で働きました。しかしそこは毎日死者が出るような厳しい環境でした。私は怖くなって最初の1ヶ月で夜逃げを決行しました。ある日の夜、お風呂に入った時に小さな窓から抜け出したんです。捕まったら大変なことになるかもしれない。そんな恐怖を感じながら木の上でその夜を過ごして、明るくなってから逃げました。

その後、大阪の関西高等工業学校夜間部で経営を学びながら重工業の会社に勤めました。そこで経営とはどういうものなのか自分の目で確かめたり実際に学んだりしました。

その後、神戸に戻り、幼少期に親戚が経営しており、当時のノウハウを覚えていた製綿工場を経営し始めました。神戸に来て暫くしてからパチンコ業も始めました。神戸には長くいたので知人も多く簡単に始めることができたというのが理由ですね。

日本へ来た理由とは

―どうして日本に来ようと思ったのですか？

平田さん：当時の朝鮮半島は日本の占領下にあり、不自由の多い生活でした。さらに貧しい農家の生まれだったので将来は家を継いで貧しいまま暮らすのだと思いながら生活をしていました。そんな中、日本で商業をして人生を成功させたいという憧れが芽生えてきたんですね。いてもたってもいられなくなった私は、単身、石炭船に乗り込み日本へやってきたというわけです。

来日当時の周囲の状況について

―日本に来た当時、周囲はどんな反応でしたか？

平田さん：神戸に親戚がいたので初めて来た時はそこを頼ったのですが、なかなか相手にしてもらえなかったですね。銀行に行っても朝鮮半島から来たというだけで取引させてもらえないということもありました。ですが自分の身近にいた日本人は朝鮮人の私たちをあまり軽蔑しなかったですね。私は人間関係をとても大切にしていたので周囲の人たちとはうまく打ち解けることができました。日本人と喧嘩などはしたことがないですし、周囲の人からは「平田さんは紳士だ」なんて言ってもらえたりもしました。土地を優先的に分けてもらったことなんかもありました。一番大切なことは信用なのだと思います。

神戸から小樽へ来るまでの経緯とは

―どのような経緯で小樽に来られたのですか？

平田さん：神戸で製綿工場を経営していた時に、仕事で北海道の余市町と取引をしていました。仕事として余市町と取引をしていくうちに、余市について段々詳しくなってきたんです。興味がわいてきたんですね。妻が北海道出身であったことも重なり、その後、余市町で布団関係の仕事を始めました。

そこで友人から「小樽というまちで空き店舗を安く借りられるみたいだぞ」という話を聞き、自分でお店を持ちたいと考えていた私は、小樽へ移りました。

小樽では民団の団長になったり、「若草企業」を創設したり、様々な活動をしてきました。「若草企業」では、パチンコ業や不動産業をやっていました。札幌でもパチンコ業をしたり、倶知安でボウリング場などを経営したりもしていました。

小樽民団の発足と会長就任について

―小樽民団ではどのような活動をされていたのですか？

平田さん：そもそも民団は昭和21年に在日韓国人が集まって発足した団体で、在日韓国人の法的地位の確立や、民政安定、文化向上、国際親善、祖国の発展、平和・統一を主な目的として活動しています。北海道には札幌に地方本部があり、小樽はその支部に当たります。

同26年に発足した当時、小樽民団には会長がいない状況でした。特に活動もしていなかったため、在日韓国人の方々はとても困っていたのです。そんな状況を打開しようと私は同36年に小樽民団初代団長に就任し、民団の礎を作り、立て直しました。具体的には在日韓国人の不安を和らげるために親睦会を開いたりしていました。そこで日本にうまくなじめない人のケアをしたり、在日韓国人同士の仲を深めたりしていました。その活動が評価されて、平成18（2006）年に当時の韓国大統領から表彰されたこともありました。

民団の団長として苦労したこととは

―民団の団長になってからの苦労したことは何ですか？

平田さん：小樽で商売をしながら札幌などに出向いて民団の活動をしていましたから、なかなか大変でしたね。事務に必要な電話なども揃えることができなくて苦労しました。何より大変だったのは当時の在日韓国人の中には、詐欺や喧嘩など悪いことをする人がいたんです。そういう一部の人たちを更生させて信用を勝ち取っていくのがとても難しかったですね。

現在の活動について

―現在はどのような活動をされているのですか？

平田さん：私が団長になったときとあまり変わっていません。現在の小樽民団は在日韓国人たちの親睦会などを主な活動としています。日本人向けにハングル教室なども開いています。小樽の人と在日韓国人とがうまく関わりあっていけるように、これからも信用を大切にして活動を続けていきたいと思っています。

まとめ

―私たちはこのプロジェクトに取り組むまで、小樽と朝鮮半島がどんなところでつながっているのか知らなかったが、インタビューを通して小樽と朝鮮半島の意外な関係を知ることができた。平田さんは日本に来てから色々なことを学ばれ、活躍されてきた。私たちも将来、平田さんのように行動力と責任感を持った人間になれるよう、これからの学生生活に励んでいきたいと思った。

梁川通りにあるグランドパレス。平田さんがオーナーをつとめる。

インタビューの様子。

チーム17
見角 亮・南山 友里・森山 天・山上 凌輔

草の根交流がつなぐ ロシアと小樽

本間（ほんま） 雅子（まさこ）さん
日本ユーラシア協会小樽支部 副部長

プロフィール
昭和26（1951）年、小樽市生まれ。札幌大谷短期大学・音楽科卒。音楽をはじめとしたロシアの芸術に関心があり、平成2（1990）年、日ソ協会（現・日本ユーラシア協会）でロシア語を学び始める。約15年間、日本ユーラシア協会小樽支部副部長を務め、ロシア・ナホトカ市との姉妹都市交流を主とした、様々な民間交流に関わる。同29年には、日本ユーラシア協会にとって創立60周年を迎え、創立記念祝賀会やピアノリサイタルが行われ、小樽支部ではパネル展「60年のあゆみ」が開催された。

小樽とロシア、向かい合う二つの国には長い交流の歴史が存在する。小樽でその交流を推進してきたのが、日本ユーラシア協会小樽支部である。今回、副支部長をつとめる本間雅子さんにインタビューをする機会をいただいた。北方領土問題をはじめ、近年ロシアと日本との関係が良好とは言えない状況である中、国家体制の違いを超えた市民間の〝草の根交流〟にはどのような力があるのかを伺った。

日本ユーラシア協会とは

―日本ユーラシア協会（以下、日ユ協会）について教えてください。

本間さん：日ユ協会は、旧ソ連諸国民との友好や相互理解を通して、世界平和に寄与することを目的としています。ロシア語講座や姉妹都市交流などの民間の草の根交流を主に行ない、市民レベルのネットワークづくりをめざしています。小樽支部ではナホトカ市との姉妹都市交流が盛んで、大人から子供まで音楽会やスポーツ交流会を通して仲を深めています。

入会したきっかけとは

―本間さんが日本ユーラシア協会に入ったきっかけは何だったのですか？

本間さん：音楽科出身ということもあり、昔からロシアの音楽や文学、美術に関心がありました。また、夫の仕事が漁業関係でロシアとのつながりが深かったことも理由です。そんな身近な存在であったロシアの言語を学びたいと思い入会しました。

日ユ協会とロシアとの交流の歴史

―日本ユーラシア協会小樽支部は、どのようにロシア・小樽間の交流を進めてきたのでしょうか？

本間さん：日ユ協会の歴史は古く、前身の日ソ協会が設立されのは昭和32（1957）年でした。ソ連時代は国家体制が違うため民間交流を活発に行うのは難しい状況でした。その中でも日ソ協会小樽支部はソ連との文化交流を行っており、両市の間での文化交流を続けていました。一方、小樽市は同41年に、以前から日本海を隔てた同じ港町として小樽とつながりがあったナホトカ市と姉妹都市提携を結びました。

ソ連崩壊後の平成4（1992）年、協会の名前を「日本ユーラシア協会」に改称し、新たなスタートを切りました。名前を「ユーラシア」としたのは、ロシアに限定するのではなく、前身の日ソ協会が続けてきた旧ソ連諸国の人々との交流を崩壊後も引き継ごうという意思があったからでした。

体制が変わって以後の10年間は、ロシア・小樽間の交流の最盛期でした。貿易など経済的な関係も進展し、小樽港には毎日何隻ものロシア船が出入りしたり、まちではあちこちでロシア人が歩いていたり、小樽の人々にとってロシアはとても身近な存在であったのではないかと思います。それに伴ってロシア語熱が高まり、受講者がたくさんいました。日ユ協会は、今までの長い歴史を評価され、文化交流推進の担い手となりました。中でも思い出に残っているのは、平成7年のロシアンバザールと、平成19年に小樽市代表団としてナホトカを訪問したことですね。本当に楽しかったです。そこで交流した人とは今でも連絡を続けていますよ。

草の根交流を続ける理由とは

―民間の草の根交流を続けるのはどうしてですか？

本間さん：漠然とした国自体のイメージでそこに住む人々も同じだと固定観念で捉えてしまうことはよくあると思います。例えば、ロシア人は冷たいだとか。それは、自分に程遠いからこそ勝手に作り上げてしまう印象です。草の根交流は、人と人とのふれあいです。顔を合わせ、対話することで、一人一人を知ることができます。今まで私は多くのロシア人と知り合いになりました。お付き合いを通して感じることは、みなさん人情に溢れた優しい人々だということです。これは、直接会って、時間を共にしたからこそわかったことです。草の根交流を続けるのは、それが本当の友好関係を実現させられると思うからです。

現在のロシアとの関係について

―今のロシアとの関係について教えてください。また今後、ロシアと小樽の関係はどのようになってほしいと思いますか？

本間さん：昔、特に崩壊後の10年に比べると今は民間交流の元気がないですね。昔ほどロシアの方は見られませんし、熱があるようには感じません。やはり、ロシアを身近に感じることが熱の復活には必要だと思います。私が日ユ協会に入った時のように、人々のロシアに対する関心を高めることが鍵だと思います。海を挟んで向かいにあるくらい地理的に近い小樽とロシアですから、共通点も多く、人々はすぐ仲良くなれると思います。だからこそ、これからも草の根交流を続けたいですね。また、交流の規模を大きくして、よりたくさんの人に参加して欲しいと思います。

商大生に期待すること

―小樽商科大学の学生に期待することはありますか？

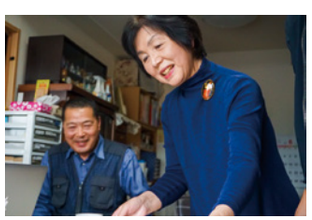
本間さん：日ユ協会小樽支部は高齢化しており、若い人がとても少ないです。先入観の少ない若者たちは、対人間の交流促進と、まだ未発展の経済分野で大いに活躍してくれると思いますし、私たちの活動に参加してくれたら嬉しいですね。

まとめ

―日本ユーラシア協会小樽支部が続けてきた民間同士の草の根交流では、交流を行うことで、一人一人が相手国に親近感を感じ、その国の人々のことを考えるようになる。それを積み重ねることで、国同士の友好関係につながっていく。本間さんへのインタビューを通して、日ユ協会の活動にはその願いが込められていると感じた。国同士の政治的対立があったとしても、地道な草の根交流を続けることで、対立に惑わされない深く強いつながり、友好関係を築くことができることを学んだ。

交流の記録。

小樽駅横のナホトカと小樽の友好都市記念壁画。


インタビューの様子。

写真アルバムを拝見しながらお話を伺った。

チーム18
山本 健人・渡邉 千湖・何 申・GE.Chenwen

漁業から水産加工業へ

松田（まつだ） 亙（わたる） さん

株式会社小樽海洋水産 代表取締役

プロフィール

昭和31（1956）年、小樽市生まれ。札幌光星高校卒。中央大学経済学部卒業後、父が経営していた松田漁業に入社。平成6（1994）年、松田漁業倒産。同8年、魚を加工し、ギフトとして提供する小樽海洋水産を創業。切り身、漬け魚、魚醤などの商品を販売している。

私たちは、小樽海洋水産の社長、松田亙さんにインタビューを実施した。かつての松田漁業のことや、現在、松田さんが経営している小樽海洋水産、販売している切り身、漬け魚、魚醤などの商品について、興味深いお話を聞くことができた。

生い立ちとは

—松田さんの生い立ちを教えてください。

松田さん：実家はずっと小樽で、高校は札幌、大学は東京でした。大学卒業後、父が経営していた松田漁業に入社しました。しかし、38歳の時に漁業会社が困難に陥り、倒産してしまいました。40歳の時、今度は魚を加工してギフトとして提供しようと考えまして、現在の小樽海洋水産を立ち上げました。切り身、漬け魚、魚醤などの商品が年間を通して売れています。また、10月から3月までは、海鮮鍋などの商品も展開しています。

会社設立までの経緯とは

—小樽海洋水産を立ち上げるまでの経緯を教えてください。

松田さん：私は最初は歯医者になろうと思っていました。しかし、祖父が私を呼び出し、明治時代に曾祖父と苦労して起こした松田漁業を継ぐように言いました。あまりにも真剣に言われたので、素直に会社を継ぐことを決めました。その後、大学を卒業し松田漁業に入社しました。松田漁業は戦前、東京以北でナンバーワンともいわれた漁業企業でした。その当時、まだ漁業が盛んで、魚もたくさん獲れました。

しかし、昭和52（1977）年に領海法が改正され、国の海岸から200海里に外国船は勝手に漁をしてはいけないという国際的なルールが決まりました。ロシアに魚を獲りに行くにしても、入漁料を支払う必要があったので、リスクを負いながら漁業をすることになり、漁業は徐々に衰退していきました。結局、うちのような漁業会社がたくさん潰れて、輸入が増え、構造的には海外から輸入するという形に変わりました。

また、実は現在もある松田ビルは、その時の国からの減船保障によるお金で購入したものなのです。これは先を見据えての行動だったのかもしれません。そこで、私は漁業が駄目になったら何をすればいいのかと思った時に、ここには資源がたくさんあったので、これを加工して小樽を道外、本州にアピールできるということで、小樽海洋水産を立ち上げました。

「小樽」のブランド力を活用

—小樽海洋水産の経営方針を教えてください。

松田さん：松田漁業時代は、お客さんはいませんでした。魚を獲り、市場に卸すだけでした。しかし、小樽海洋水産は商品を企画し、取引先に売り込みにいきます。最初は、漬け魚などの商品を作って、東京のギフト会社などに、「小樽」で作っているというコンセプトで持っていきました。小樽は知名度が高く、人目を惹くので、どこでも小樽と分かるように社名に小樽を入れました。小樽では商売をせず、特に人口の多い関東圏を狙って商売しようという考えでした。小樽の知名度で、少しずつ話ができ、漬け魚などの商品も一つずつ採用してもらいました。最初に行ったギフト屋さんが海鮮鍋のセットを販売していましたが、具材が少なく、「うちならもっとボリュームを出せます」と言ったところ、ぜひ作ってほしいということで、ここから売上が伸びてきました。そこで得たノウハウで、郵便局やデパートにも徐々に売り込み、評価されてきました。昔は自分だけでアイディアを出していましたが、今はみんなで少しずつアイディアを出し、商品を考案しています。最近では、商品の手軽さを重視し、レンジでチンするだけですぐに食べられるお鍋の商品などを手掛けています。

商品の基盤 魚醤「雅」について

—魚醤「雅」について教えてください？

松田さん：「雅」は我が社の魚醤です。お刺身に使う甘エビを米麹と塩だけで35度の熟成庫で3ヶ月程度寝かせ、絞り、不純物を全部取って出来上がります。単純に醤油ではなく調味料です。色々な料理の隠し味としてちょっと入れると、料理の味がより豊かになります。我が社のお鍋にも隠し味で使っています。甘エビの魚醤を作っている会社はほとんどないので、うちは「雅」を別の商品に加えることで、差別化を狙っています。「雅」は、当初は販売する予定はなかったですが、せっかくだから瓶詰にして売ろうという話が出て、商品になりました。

小樽の地域活性化について

—小樽の地域活性化についてどのようにお考えですか？

松田さん：私は経営者です。私の経営で会社が良くなり、社員の給料をあげたり、新たに雇用したりして、その社員たちがここでものを買い、結婚して、子供を育てたりします。これが私の考えている地域活性化です。企業家として、社員が根付くような会社づくりをし、社員の生活レベルを上げることが、地域活性化につながると思います。社員の幸福が企業としての社会貢献だと思います。

今後の夢について

—松田さんの夢は何でしょうか？

松田さん：近郊で漁をしている漁師さんたちとレストランを作ることですね。小樽の美味しい水産物を活かした料理を提供するレストランを作りたいと思っています。

まとめ

—インタビューを通じて、現在と昔の漁業の変遷を知ることができた。その過程で、松田漁業が倒産したにもかかわらず、松田さんは残った資源を活用して再起し、数多くの特色のある商品を販売し、さらに地域にも貢献する企業家として活躍している。我々は多くのことを松田さんから学ぶことができた。

小樽海鮮一人鍋セット。

魚醤「雅」。

インタビューの様子。

チーム19
金 鶴・RAO,Zexin・上田 裕太
Intan Fatnin Safurah Binti Saahari

ホラ吹き昆布屋と小樽

蓑谷（みのや） 修（おさむ） さん

有限会社利尻屋みのや 代表

プロフィール

昭和15（1940）年、利尻島生まれ。16歳で小樽へ。小樽千秋高校（現・小樽工業高校）に進学。卒業後、北海製罐の子会社に就職。約30年間勤め、50歳の時に退職。平成3（1991）年、利尻屋みのやを創業。その後、小樽ウィングベイの店舗や大正クーブ館、不老館と店舗を増やし、現在は5店舗で独特のキャッチフレーズを持つユニークな商品を提供している。昆布店のほか、同19年には出世前広場、同21年には小樽歴史館を開設するなど、小樽・堺町通りのまちづくり、観光業にも積極的に携わっている。

16歳で社長を夢見て利尻島から小樽へやって来た。50歳で会社を辞めて昆布屋になった。自らをホラ吹きだといい、ユニークな戦略で昆布屋を経営する利尻屋みのやの代表、蓑谷修さんが考える小樽、これからの小樽とはどのようなものだろうか。

″ホラ吹き″の″ホラ″とは

―″ホラ吹き″を自称する蓑谷さんですが″ホラ″とはどのようなものですか。

蓑谷さん：ホラとは自らを奮い立たせるために吹くものです。ウソとホラは全く違うのです。ウソとは自分も相手もごまかして相手を欺くものです。昔の人々は、みなホラを吹いて自分や周りの人を鼓舞していました。吉田茂しかり、所得倍増の池田隼人しかり、ホラを吹くことで日本は発展を遂げてきたのです。しかし今、ホラを吹ける大人がいなくなってしまった。私はホラを吹くことで、まずはお客様の足を止め、中に入りくつろいでもらうことで観光を支える柱になると考え、そのためにもユーモアのあるホラを大切にしています。

生い立ちとは

―利尻での生活と小樽に来た経緯について教えてください。

蓑谷さん：子供のころから社長になりたかったのです。私が生まれ育った利尻では周りの大人みんなが大きな夢を持っていて、それぞれがホラを吹き、声高に自分の目標を語っていました。利尻の実家には小樽の人々がたくさん訪れ、きらびやかに賑わう小樽の話を耳にしていまして、いつしか私も小樽で社長になりたいという夢を抱くようになりました。そういうわけで、高校に入学する際に小樽に行くことを決意して、小樽の高校の機械科で3年間勉強に励みました。

昆布屋を開くまでの経緯とは

―会社を辞めて昆布屋になったいきさつと理由を教えてください。

蓑谷さん：16歳で小樽へ来まして、高校を卒業後、北海製罐の子会社に就職しました。働く中で自身の勉強不足を痛感し、周囲の人、時には自分より若い人にも教わりながら、必死に″学ぶ″努力を続けました。しかし、「このままでは幼い頃からの夢であった社長にはなれない」と思いまして、50歳を迎えた頃に約30年勤めた会社を辞めることを決意しました。会社を辞めて私が自分の夢を叶えるためにまず目をつけたのが、当時の健康食ブームで注目されていた昆布でした。昆布に含まれる食物繊維やミネラルには体の調子を整える効果があるんです。しかし、当時の昆布に対する世間の認識というものは、″出汁をとるもの″でしかなかったんですね。そこで私は「世の全ての女性にきれいでいてほしい」という願いを込めて、昆布を販売する会社を立ち上げました。それが現在の「利尻屋みのや」なんですよ。周囲の人たちには「昆布で飯は食えない」と言われ、家族には退職金をもらえなかったことで叱られました（笑）。それでも私は、ホラを吹きながら昆布を売ることに挑戦したかったんです。

小樽のまちについて考えること

―蓑谷さんが今の小樽のまちについて考えることは何ですか？

蓑谷さん：小樽というのは、平地がなく農業に向かない。200海里が施行されてから北洋漁業も失ってしまった。基盤の弱い零細企業が多い。そのために基幹産業がほとんどないと言ってよいまちなんですね。昭和40年代までは複合的な産業で栄えていた小樽のまちは現在、次の複合的な産業が育つまでの間、観光産業でかろうじて経済をつないでいる状態です。山坂が多く、海がある。石蔵や歴史的建造物など歴史を感じられるまち並みがある。それを求めてたくさんの観光客が小樽へと足を運んでくれています。

毎年多くの観光客が世界中から訪れてくれるのですが、アジア、特に東南アジアからのお客様が多いですね。小樽の観光、経済は世界中からの観光客に大いに助けられているという現状をまずは理解しなければならない。もはや、市内や地元の客相手だけの商売ではやっていくことが出来ないのは明らかです。現在の利尻屋みのやもアジアをはじめ、外国の方のおかげでやっていくことが出来ているという点で、利尻屋みのや＝小樽といっても過言ではないほど、みのやは小樽の現状をよく表していると思います。

これからの小樽への思いとは

―これからの小樽への思いを聞かせてください。

蓑谷さん：最近は昔ながらの風情ある風景というものが失われつつあります。ガラス張りの近代的な建物だらけ、のぼりだらけのまち並み。ミニ東京・ミニ札幌になってしまっては誰も小樽に来てくれなくなる。他都市と同じことをしても小樽では意味がない。そこで私はそれとは反対に「小樽に残された古き良きまち並みを保存して小路の文化をやろう」と思いまして、そこで出世前広場や小樽歴史館のような取り組みをしています。まち並みは産業、まち並みは文化です。明治新政府がやったことがすべて小樽には残っているのです。そのまち並みを守り、活かしていくことがただ一つの小樽の生きる道です。

これだけ急速に少子高齢化の進む今、小樽の人々は将来を生き延びる道を真剣に考えなければならないと思います。札幌市に近いという土地柄、若者がどんどん出て行ってしまい、今の状況に胡坐をかいていては気づいた時には取り返しのつかないことになってしまうかもしれません。問題は危機感が薄いということです。皆が「誰かがやってくれる」と思っていては誰もやらないのです。自分がよければいいのではなく公のために尽くすこと。観光都市としてやっていくならただ商品を並べるのではなく、おもてなしの心をもって隅々まで心を配ること。地元の人が現状に危機感を持って対処すること。やらねばならないことは多いと思います。

まとめ

―今回のインタビューで、蓑谷さんの人柄に触れることができ、楽しいお話を聞くことも出来たが、特に印象に残ったのは蓑谷さんが小樽のこれからについて話す真剣な表情だ。ユーモアあふれる商品や、お客さんが座って休めるスペースを広く確保した店内、愉快な冗談や、出世前広場などのまち並みづくり、その全ての根底に、小樽を観光で訪れてくれる方への感謝とおもてなしの心、楽しんでもらいたいという思いがあるのだと分かった。危機感を持たなければいけない、他人任せでは駄目だ、と自らまち並みづくりや観光都市として生き残るための戦略を実践する蓑谷さんのお話には小樽への熱い思いがあふれていた。そして私たち商大生への期待と願望をお聞かせいただいた。小樽の発展を支えてきた方々の知恵と熱意を引き出し、小樽商科大学と商店街が奮起して本気で連携を行い、斜陽産業のまちと呼ばれてしまった小樽を再興するための契機となる意味のあるものとしてほしい。そんな蓑谷さんの思いが印象的だった。

インタビューの様子。小樽歴史館の一室を利用させていただいた。

チーム20
工藤 秀矢・坂本 涼太・嶋崎 克隆・戸田 裕子

北海道の洋菓子喫茶のさきがけ
～米華堂のいまむかし～

米華堂
八木（やぎ） 明美（あけみ） さん

プロフィール
昭和39（1964）年、小樽市生まれ。奥沢で育つ。小樽桜陽高校卒。その後、小樽歯科衛生士専門学校へ進み、10年ほど歯科衛生士として勤める。平成6（1994）年に米華堂の三代目店主である八木浩司さんと結婚。それを機に米華堂で働き始める。現在は地元の人と関わり合いながら商品の販売を担当している。米華堂の店名は、英語の「ベーカー」（パン屋）と仏語の「ガトー」を組み合わせて漢字をあてたことに由来。

私たちは、米華堂の三代目店主、八木浩司さんの妻である明美さんにインタビューを行った。米華堂は、昭和3（1928）年創業の、喫茶店と洋菓子屋が合わさった当時の最新スタイルを道内でいち早く取り入れたお店である。明美さんから見た米華堂のこれまでの歴史とこれからについてお話を伺った。

米華堂の歴史とは

―まず、来年で90周年を迎える米華堂さんのこれまでのあゆみをお聞きしたいです。

八木さん：創業は90年ほど前なので、日中戦争前のことになりますが、台湾が日本の領土だった頃、日本の新高製菓が南京に出店していました。そこの経営者の親戚だった初代の八木清さんは、その人の影響もあって東京で外国人に洋菓子の作り方を習い、小樽に自分の店を構えたのが始まりだと聞いています。元々本店は商大通り（現・阿部建設付近）にありました。2号店として花園に出店し（今の場所の向かい）、平成15（2003）年に現在の場所に移転しました。

移転の経緯とは

―どうして店舗の場所を移したのですか？

八木さん：清さんは戦争へ行ったんですよ。その戦場から僕の代わりにお店をこういう方針で経営してほしいという手紙が届き、それでここ花園に移転することにしたそうです。清さんは南京にも米華堂を出店しようと視察まで行きましたが、途中で亡くなられました。その後、奥さんが経営を支え、二代目である私の義父が引き継ぎました。そして三代目の私の夫は神戸へ菓子職人として修業に行き、それまでの味に修行の成果を加え、今に至るまで引き継がれています。私が歯科衛生士として働いていた頃、よくクリームぜんざいなどを買いに来ていましたよ。私は平成6年にお嫁に来ました。

小樽商大生との関わり

―米華堂は商大と関わりが深いとのことですが、商大生のイメージはどのようなかんじでしょうか？

八木さん：私が子どもの頃は、「花銀」（花園銀座商店街）はおめかしして行くような〝街〟というかんじで、休日は人の頭で道が埋まって真っ黒になるほどだったんですよ。その頃、私の実家では知り合いから商大生をお預かりしたのがきっかけで、商大生の下宿をやっていました。だから家にはお兄ちゃんがたくさんいるかんじでしたね。私の小学生の時の机も、商大生が置いていったものを使いました。昔、米華堂は商大生のたまり場だったらしく、店内に流れるレコードの曲のリクエストをよく受けていたそうですよ。

商大生の活動について

―商大生が企画した、お菓子を小樽の観光資源にしようという活動に参加されたそうですね。

八木さん：はい、いくつかそのような活動に参加しました。その一つに、商大生がまちの人から募集したお菓子を作ってサンモールで販売したことがあります。基本的に店以外では販売しないのですが、皆さんが頑張ろうとしていることはお手伝いしたいと思っています。小樽笑店や小樽雪あかりの路のボランティアなど商大生の地域おこしの活動が広まっていったのは、その時の活動がきっかけの一つになっているように思います。

愛し、愛される米華堂

―お店が長く続いている秘訣とは何でしょうか？

八木さん：昔から米華堂は買い物の帰りに寄ってもらったり、近所のお店の人が来てくれたりしました。そんなかんじで地元のお客さんに可愛がられていることが長く続いてきた秘訣だと思います。私が旦那さんと結婚してお店で働くようになった時、常連のお客さんからも仕事を教わったので、皆さんに育ててもらったかんじがありますね。地元のお客さんとつながりがあるからこそ、今まで続けてこられたのかもしれません。

お店のこだわりとは

―明美さんのお店のこだわりを教えてください。

八木さん：14年前に今の場所に引っ越してきたのを機にお客さんがもっと気軽に来れるよう、それまで暗かった店内を明るくしました。でも全て変えてしまうと常連のお客さまが来づらくなってしまうので、机や椅子の配置をそのままにして昔の雰囲気も残しています。ケーキに関して言うと、4つ買って千円くらいになって、手軽に家でみんなと一緒に食べてもらえるような値段設定にしています。みなさんに親しんでもらえる店にしようということは心がけていますね。

お店の経営方針とは

―チェーン店を出すなど、お店を大きくすることは考えたことはありますか？

八木さん：一時期そういうお誘いをいただいたこともありました。でも、この場所以外で商品を売ることになると、いつも来てくださる地元のお客さんたちへの対応が弱くなってしまします。私たちはこの場所で、ここに来てくれるお客さんを大事にしたいので、今のかたちのままお店を続けていきます。

まとめ

―今回のインタビューで明美さんが最も強調しておっしゃっていたことは「地元のために」という言葉だった。実際、インタビューをしているときにも多くの常連さんが来店し、明美さんとの会話を楽しんでいる様子を垣間見ることができた。その時、私たちは、米華堂はこれからも地元の人々に愛されるお店であり続けることを確信できた。

お店の外観。

インタビューの様子。

ケーキの並ぶショーケース。ケーキは空気に触れると酸化してしまうので、並べるケーキの個数は最小限にしているとのこと。

お客さんのお子さんの相手をする明美さんの様子。地元の人たちとのつながりの深さが窺える。

米華堂のモンブラン。ココアスポンジと生クリームをサンドしたもので、一般的な栗のモンブランとは異なる。

チーム21
中田 優香・中野 彩香・松尾 剛志

故郷・小樽に捧げた12年

山田 勝麿（やまだ かつまろ）さん

元小樽市長

プロフィール

昭和14（1939）年、小樽市生まれ。小樽商科大学短期大学部、日本大学通信教育部経済学部を卒業後、同35年、小樽市役所に勤務。社会教育部長、学校教育部長、経済部長、総務部長、収入役など数々の役職を経て、平成11（1999）年4月、第11代小樽市長に就任。財政健全化や市立病院の統合・新築などに尽力した。以降、3期連続で市長を務め、同23年に退任。

かつて小樽は人口が20万人以上にものぼり、北海道経済の中心的な役割を果たすなど、繁栄を極めていたが、斜陽のまちと言われるようになった。近年、観光都市としてのイメージは定着したが、人口減少が続くなど、地域活性化が課題となっている。私たちは、そんな時代に市長を務め、小樽の活性化に取り組んでこられた山田勝麿さんにお話を伺った。

市長に立候補するまでの経緯

―まず、山田さんが市長に立候補した時の状況や、ご自身の覚悟はどのようなものだったか教えてください。

山田さん：初めて「市長に立候補してほしい」と言われた時、全くの想定外だったものだから本当に驚きました。すぐに断った。まず選挙に受かるかどうかが分かりませんし、そう簡単なものではありません。一番気がかりだったのは家族も巻き込んでしまうということでした。ですが、その後何度も説得され、苦しい道を選ぶか安易な道を選ぶか、と言われたところで、最後は「やるしかない」と覚悟を決め、立候補しました。

繁栄から財政難の時代へ

―大変な決断だったのですね。山田さんの市役所職員時代、また小樽市長時代の小樽はどのような状況だったのでしょうか？

山田さん：私が小樽市役所に入った頃、小樽市の人口はピークの20万7千人に達していました。経済の中心地で銀行も数多くあり、大きなデパートも三つあって、小樽はとてもにぎわっていました。市役所の職員数も多くて、活気に溢れていました。それがバブル経済の崩壊で厳しい財政状況になってしまい、苦しい時期を迎えた。「失われた10年」と言われるちょうどその頃、平成11（1999）年に私は市長に就任しました。この状況をなんとか打破しようと、人・設備・借金の三つの過剰の解消に取り組みました。しかし、国の「三位一体の改革」により地方交付税が大幅に削減されてしまい、仕方なく赤字予算を組んだことは本当に残念でしたね。

過剰解消の取り組み

―その時の過剰解消の取り組みについて詳しく聞かせていただけますか？

山田さん：小樽市は二つの港、保健所を持っています。それに加えて当時は、市立病院も二つ持っていました。また、小樽だけでなく北海道全体が行政依存型であったため、当時の市役所の仕事は非常に多かったんですね。そのせいもあって人口規模にしたら職員数も多かった。それが財政難の一因にもなっていました。そこで財政緊急対策会議を設けて、皆で危機的状況を理解し合い、財政再建に着手しました。職員数を減らして、手厚く行ってきた市民サービスも廃止したりしました。ただ、北海道は景気が悪くなっていたため市税収入は減少し、さらに国の「三位一体の改革」が重なってしまいました。三位一体の改革というのは、地方交付税や国庫補助金を減額する代わりに税源を地方へ移譲していくというものです。それにより結局、小樽市は20億円もの収入減になってしまいました。ゆえに赤字予算を組むしかなかったんです。それで国会で指摘されてしまいました。三位一体の改革が悪いとは思わないですが、自治体によって状況は様々ですから、そこを加味して措置をして欲しかった。非常に悔しくて無念で、市民に対しても申し訳ないと思ったけど、この決断はある意味で必要なことだったと思いますね。

市立病院の建設について

―それほど財政状況が厳しかった中、病院政策に特に力を入れられていらっしゃいましたが、その理由を教えてください。

山田さん：当時、市立病院は赤字を抱えていました。二つの病院はどちらも古くて効率が悪く、どうにかしなければいけない状況でした。最初は二つの病院の統合を考えたけど、新しい機械などが導入できず、また、現在の病院の跡地に建設するとなると、建設最中に病院を利用する患者はどうするのかといった様々な問題が露呈したため、最終的に新しい病院を造ることを決断しました。私は量徳小学校を廃校にして造りたかったんだけれど、その案には量徳小学校の父兄の皆さんや卒業生から反対の声が数多く挙がり、中には新しい病院を作ること自体に異議を訴える声もありました。そのような中で何度も建設案を考え直し、最終的には量徳小学校の関係者の皆さんのご了承をいただいて学校を廃校にし、さらに二つの病院で800床あったベッドの数を380床にまで減らすことで案は固まりました。新病院は、私が市長を退任してから2年後に完成しました。

病院が完成した今の心境とは

―様々な反対の声がある中での苦渋の決断だったのですね。実際に病院ができたいま、当時の決断をどのように思われますか？

山田さん：私もたまに行きますが、患者さんたちからは「病院ができて良かったよ」と言われることが本当に多くて嬉しいです。なかなか詳細が決まらず、何年も練り続け、さらには医者不足もあったりして時間はかかりましたが、いまは造ることができて本当に良かったと思いますね。

故郷・小樽を元気にしたい

―最後になりますが、山田さんは様々な政策を行う中で、どのような信念をもって取り組んでこられましたか？

山田さん：とにかく、故郷・小樽のまちを何とかしたいという一心で取り組んできました。小樽には、変化があって、新しいものも古いものもどちらもある。札幌や東京といった都会にはない魅力があるよね。だからこそ、そこを活かしたいです。もっとたくさんの方に小樽へ来てもらいたいですね。「住んでよし、訪れてよし」といった理念で小樽のまちを元気にしていきたいと強く思っています。

まとめ

―今回山田さんにお話を伺って、私たちが知らない時代の小樽を知ることができた。激動の時代に小樽市政を率いてきた山田さんが、「小樽のまちを何とかして元気にしたい」と放った言葉が印象に残った。山田さんの思いが今の小樽を作る人々に伝わっていることを願う。

小樽市立病院外観。

インタビューの様子。

チーム22
吉田 亜実・張 庭愷・瀬戸 涼夏

公開座談会
「小樽のひとに学ぶ
～手宮の歴史文化とまちづくり～」

- 日程：2017年11月14日（火）17時半～20時
- 会場：おたる千成（小樽市錦町20-20）
- 主催：小樽商科大学グローカル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部
- 後援：小樽市教育委員会、手宮地区連合町会（厩町会・末広町会・手宮町会・末広三町会・梅ヶ枝町会・豊川町会・清水町会・源町内会・石山町会・東石山町会・錦町会）
- パネラー：遠藤久子（丸い遠藤商店）、嶋影良彌（ざっかす島影）、佐々木一夫（運河プラザ喫茶一番庫）、山下秀治（株式会社ヤマシタ）、安斎哲也（小樽市議会議員）、小樽商科大学学生（天満康美、島田ニコラ、沢田誠斗、山保直之、島崎翔、落合亮）
- 司会進行：後藤英之（小樽商科大学グローカル戦略推進センター准教授）
- 座談会司会：高野宏康、小山田健（小樽商科大学グローカル戦略推進センター学術研究員）

授業でインタビューをお願いした方を中心に、手宮界隈の5名の方と小樽商科大学の学生の公開座談会を開催しました。手宮地区は古くから漁業、商業、北海道の鉄道発祥の地として繁栄し、小樽発展の原点となった地域であり、同地区の住民と本プロジェクトに参加した学生が座談会により意見交換することで、地域の魅力を再発見し、今後のまちづくりに活かす方法について議論しました。5名のパネラーからは、手宮の特徴、かつての繁栄の様子、小樽商大生との関わり、大学に期待すること等が語られ、学生からは授業やサークル、アルバイト等、手宮地区での活動について、学生の視点からみた手宮の魅力と課題などが語られました。参加した定員を大きく上回る、約90名の市民らは熱心に耳を傾け、各自の視点から手宮の魅力や意見を述べていただきました。ここでは内容の一部を掲載します。

公開座談会のちらし

●遠藤久子さん：私は昭和11（1936）年に色内で漁網の卸業を営む「さ印川守田商店」の三女に生まれましたが、実は、昭和33年にお嫁に来るまで手宮のまちのことはよく知りませんでした。小さい頃、手宮公園の桜を見に行ったくらいです。お嫁に来たらとても懐が大きくて、豪快な人たちの集まっているまちで、本当にびっくりしました。もうお嫁に来て60年になりますが、手宮のみなさんに日々感謝の気持ちでいっぱいです。当時、朝6時頃になると、煮豆屋さんや豆腐屋さん、駄菓子屋さん、お餅屋さん、そして色内川下の方から体格の良いお母さんたち、若い人たち、年寄たちがみんなうねったようにやって来るのがとても印象的でした。いわゆる労働者の方が多かったですね。みんな浜の方に来るんです。手宮の方へ行く人、艀の方へ行く人など、それぞれです。運河周辺にはたくさん居酒屋というか屋台がありました。銭湯もたくさんありました。利尻や礼文、樺太あたりからこの辺にあがってきた方が、まずここで三平汁を食べるとか、一杯飲むとかいうかんじで賑わっていました。艀に住んでいるお友達もいました。遊びに行くとちゃんと艀の中がおうちになっていました。家から水着を着て上からアッパッパを着て、近所の子どもたちみんなで運河に泳ぎに行きました。運河は端が深いのですが、そこで泳いだり、しゃべったりして、本当に楽しいまちでした。遠藤家の初代（小平治）は、新潟出身で三井系の木材の仲買の仕事をやっていました。明治39（1906）年に小樽で商売をはじめました。奥さん（織代）は頭の良い方で、お米を売ったり、ご近所のお年寄りを呼んで、夏にはところてんとか水羊羹を作らせていたそうです。ただの金儲けではなく、本当に人の為に良く尽くしてくださったから今の私たちがあると思っています。手宮は、新潟、山形、石川の人など色々な人の寄せ集まりです。苦労もしてますが、手宮には一つの連帯感があるように思います。本当に良い方が多いですね。それが手宮の財産だと思います。手宮、高島、祝津あたりは小樽の中心から離れていて、少し疎外されているように思われることもありましたが、この地域みんなで何かできればと思っています。

●嶋影良彌さん：私は、昭和22（1947）年の生まれのいわゆる団塊の世代で、一番子どもが多かった世代です。昭和29年に手宮小学校に入学しました。私たちの世代は手宮小学校で2部授業を経験しています。1年生が昼まで授業で、その後に授業を受けていました。それだけ教室が少なかったのです。人数が増えたことで北手宮小学校が開校し、赤岩に北山中学校ができました。昭和39年頃、小樽は一番人口が多かったのですが、その頃、手宮には5万人くらい住んでいたそうです。いまは祝津と高島を含め1万人いるかいないかではないでしょうか。酒屋さんは手宮に34軒あったこともありますが、いまは7軒です。映画館は2軒ありました。それだけ人がいたし、繁栄していました。すごい時代でした。当時、手宮は北洋漁業の基地で50隻くらい船が入っていました。その人たちが手宮に住んで子どもをつくっていったわけです。手宮公園の方に向かっていく途中には鉄道官舎があって、鉄道関係者が住んでいました。清水町には北海製罐の社宅がありました。北海製罐では、朝、仕事に出てこいという合図の「ぽー」が鳴り、夕方4時半には仕事が終わった合図でまた鳴ります。お母さんたちに晩御飯の準備をしろというお知らせみたいなものでした。私の同級生は何人か手宮に残っていますが、少なくなりました。退職して戻ってくる人は何人かいますが、なかなか戻ってきません。だからこそ私の子どもたちや、ここにいる商大生も含めて、なんとか手宮の魅力を発信していきたいです。この地区が好きなので子どもたちにここをふるさととして忘れないでほしいというのが、私の一番の願いですね。手宮には11の町会がありますが、その他に通り町会というのがあります。その1つが錦町大通りです。通りごとに町会があるんですよ。戦後、街路灯の管理のために組織されました。錦町大通り会は小樽で3番目に街路灯がつきました。その後、銀座街、能島通りにもつきました。戦後、我々の祖先がかなり尽力したのだと思います。

●佐々木一夫さん：私はいま清水町の家に住んでいますが、昔は北海製罐の社宅でした。アメリカの家を真似た洒落た建物でしたが、今は私が住んでいる1軒だけが残っております。生まれは花園町で、小学校の頃は大きな穴の開いた50円玉を握りしめて祖父が建てた家にお使いに行きました。中野植物園のグラウンドに行ったり、叔父さんと一直線に山中海岸に行ったこともあります。今でも朝7時頃になりますと長橋の踏切の音が聞こえます。自宅から職場の運河プラザに行く途中、夏は錦色に輝く海を見ながら、秋は薬師神社のイチョウの葉を踏みしめながら、清水ヶ丘の手宮中川を下って高島通りを渡り、博物館の窓のシャッターが開く音を聞き、市場の活気ある競り声を聞いて北浜橋、旧渋澤倉庫、竜宮橋を通っています。今日、皆様にお配りした『手宮公園史』に書かれているように、手宮は古い歴史と、夏大いに盛り上がるビアガーデンなどの新しさが詰まった街で、宝物がたくさんあります。今日は皆様と手宮の歴史と新しさをお話したく参加させていただきました。手宮には運河保存運動に関わっていた山口保さんの喫茶店、メリーゴーランドがありました。小樽で日本全国から人を集めた喫茶店というのは、おそらくメリーゴーランドが最初ではないかと思っています。山口さんは元々手宮と関係のない方ですが、小樽市内の色々な所をぐるぐる回られて、手宮にお店を出すことにしたと聞いています。手宮にはそういう魅力があるのだと思います。最近は自分の住んでいるところにあまり関心がない方がたくさんいらっしゃると思いますが、自分達が住んでいるところがどういうまちなのかに興味を持つことが一番大事だと思います。

●山下秀治さん：私はニセコ町生まれですが、昭和50年にこの能島通りの千成の何軒か隣にお店を出させていただきました。その頃の手宮は人がぶつかりあうくらい人が多かったです。ここで商売をやると本当に儲かりました。正直に言うとドル箱でした。4坪くらいの小さなお店からスタートして、本当に使っても使っても使い切れないくらいのお金が入ってきました。それでもう少し広い場所ということで隣の銀座街に行きました。手宮というのは本当に人がいいというか、温かいところで、私はぞっこん惚れて一生の骨を埋めるのはここだと決めました。残念な話ですが、ここ最近は小樽でも手宮で商売していますとあまり大きな声で言えなくなってきているのが正直なところです。いか電祭りは、商売で儲けたいんだったら仲間みんなで儲けようということから始まりました。最初は自分の社員だけで私の名前をつけた秀治祭をはじめて、それがいか電祭りになって、今は手宮ビアガーデンになっています。銀座街、大通り、能島通りはそれぞれ違うと言われますが、地元ではない私からみたら手宮を一つにしていくことが大切だ思いまして、手宮の商店街が一丸となっていこうということで、平成2（1990）年に各商店街、各町内会から若手のやり手を引っ張ってきて手宮活性化委員会を立ち上げました。手宮には山と坂がたくさんあって、ちょっと小高いところから海を見ると灯りがたくさん見えます。漁師さんはあの灯りで魚やイカを獲っているのだから、我々は商店街にいか電をつけて、たくさん商店街に人を呼ぶことが絶対プラスなんだという単純な発想です。手宮の活性化のためにはわざわざ手宮に人が来る店がたくさんできればいいと思います。どこでもあるお店だけではシャッター街になってしまいます。

●安斎哲也さん：僕は札幌の生まれですが、父親を早くに亡くしたので、母親の実家がある小樽に小学校3年生の時に引っ越してきました。母方の祖父母は秋田にいたのですが、手宮はたくさん魚が捕れるし、鉄道があるから魚を市街に運んだら儲かるんじゃないかということで、一家で石山町に引っ越してきてそこで水産会社をつくりました。石山町に育ててもらったからということで、今も石山町に会社があります。石山町には石山町会と東石山町会がありますが、この東石山町会で小樽祭りの時に奴が行われます。私は石山町会なんですが、東石山町の方が野球部の監督をやっていたので誘われて参加していました。30代から40代くらいの私たちの世代は、子どもの頃、自転車で豊井浜海水浴場に行って遊んでいました。今はできませんが、ウニを獲って、家からごはんを持っていってウニを乗せて食べたりしていました。僕が小学校の頃はほとんど北運河の方には行きませんでしたね。いまの子どもたちの方が北運河で遊んでいると思います。僕は全然小樽のことも手宮のことも知らないまま外に出てしまいましたが、今の子どもたちはこういう話を聞いたり、学んだりして、上っ面の小樽の歴史ではなく、ディープな歴史を感じて育って行ってほしいと思っています。僕たちはスキー場が完備されて山に行くようになった世代です。上の世代は手宮富士で滑っていましたが、僕たちは裕福になってきた世代なので、天狗山にタクシーでスキーに行けるようになっていました。子どもでもタクシーを乗り合わせて行けば一人２００円から１００円くらいで行けます。家族や親戚が集まった時は朝里川温泉でスキーをした後に温泉に入ってご飯を食べて帰るというかんじでした。手宮の課題は、やはり人口が減って若い人がいなくなっているということです。石山町は小樽市内で4番目に人口が減っています。小学校の統廃合は悲しいですが、一つになったことで小中高連携して地域一体で子どもを育てられるような環境が作って行けることもあります。問題なのは、地域の歴史や文化が知られていないことです。地域に温かいコミュニティがあることを知っていれば、住んで子育てをしたいと思ってもらえるのではと思っています。

●天満康美さん（学生1年生。学年は当時。以下同様）：私は小樽商大1年生で、よさこいのサークルの翔楽舞と、アカペラサークルのＡＩＲＳに所属しています。翔楽舞は創設時から手宮のお店にたくさん協賛金をいただくなど、大変お世話になっています。私は札幌から小樽に通っていますが、翔楽舞の活動で夏に手宮のビアガーデンでボランティアをさせていただいています。打ち上げでは山下さんと焼肉を一緒に食べさせていただき、とても楽しい思い出になりました。ビアガーデンのボランティアでは子ども広場で子ども達と一緒に遊んだり、他サークルの学生は焼きそばを売ったりしていました。私は小樽の人にインタビューする授業や翔楽舞の活動で小樽を歩き回りました。ビアガーデンでは待ち合わせ場所の手宮のつぼ八前までタクシーで向かったのですが、ものすごい坂を登って降りての繰り返しで驚きました。帰りは9時頃で真っ暗でしたが、坂を登った時に見えた小樽の景色はディズニーランドのタワー・オブ・テラーを一番上まで登った時と同じくらい素晴らしく、小樽にもこんなにきれいなところがあるんだと感動しました。ボランティアの帰りには「焼そばを持っていきなよ」と声をかけてくださるなど、手宮の方は本当に温かいです。これからも手宮のことや小樽のことをたくさん勉強して、伝えられる立場に立てたらいいなと思いました。

●島田ニコラさん（学生 1年生）：私も同じ1年生で、サークルは国際交流サークルに所属しています。私は海外生まれですが、ずっと札幌で育ち、バイトも札幌ですので小樽のことはまだまだ勉強中です。今日は手宮の歴史や特徴についてお話をたくさん聞けてとても勉強になりました。小樽のイメージはやはり人気観光地ということですが、ディープな小樽を知ることができました。手宮のみなさんのお話を聞いて印象的だったのは、手宮への地元愛がすごく強いということです。私がインタビューした嶋影さんがまさにそうなのですが、すごく優しくて明るい方が多いです。私自身、もっと手宮のまちを好きになれました。私は歴史のあるまちが好きなのですが、小樽を歩いているとタイムスリップしたような気分になれます。歩き回るだけではなくて、もっと地域の人と関わって、その地域の魅力をアピールしたり、地域の課題について考えていきたいと思いました。

●沢田誠斗さん（学生 1年生）：1年生の沢田誠斗と申します。サークルはフォークソング部と軽音楽部、アカペラのＡＩＲＳなど音楽系サークルに入っています。函館出身ですが、函館と小樽はよく似ていると思います。駅から港までの眺めも最初は函館だと思ってしまうくらいでした。稲北フードセンターくらいから手宮方面にはあまり行かないのですが、実は山下さんのお店で散髪しています。たまたまアルバイト先に来た美容師さんに紹介してもらいました。これからも通おうと思っていますので、4年間お願いします。今日、手宮について色々お話を聞きましたが、嶋影さんは手宮で夜桜ライブを開催していたとのことですが、僕も音楽をやっているので、手宮公園など手宮にはライブにぴったりの場所がありますので、音楽で手宮を盛り上げていけたらいいなと思っています。

●**山保直之さん（学生 3年生）**：私は3年生で、地域活性化サークルの小樽笑店に所属しています。毎年夏には運河公園で子ども向けの縁日的なイベントを開催しています。手宮ビアガーデンではボランティアをしている翔楽舞のお手伝いをしていました。銭湯が好きなので手宮の玉の湯に行ったことがあります。私は小樽と自動車関連で関わりの深いウラジオストクに留学していたのですが、手宮とは鉄道が似ていると思いました。ウラジオストクも手宮も鉄道の起点で、石炭の運送に関わりがあり、互いに商業で発展した港ということもあり、共通点があるとかんじました。手宮が素晴らしいのは観光資源がたくさん残っていることです。それを活用して地域を活性化させようとする活動に精力的に関わっている方が多いということは、とても魅力的だと思います。僕は佐呂間町というオホーツクの田舎町出身ですが、かつては1万5千人程度でしたが、今は5千人をきって4千人に近づいています。小樽も観光客がたくさん来ていますが人口は減っています。手宮も人口減が激しいですが本当にいいところだと思っています。

●**島崎翔さん（学生 2年生）**：私は現在2年生ですが商大3年目です。あまり真面目な学生ではなくて恐縮です。サークルは英語サークルとアカペラに入っています。現在は駅前のバーガーキングで働いていますが、以前、手宮でデイサービスのアルバイトをやっていました。きっかけは、今後、親や祖父母の介護のために今のうちに経験しておきたいと思ったことと、介護施設の現場に関心があったということです。実際に様々な仕事を体験しましたが、地元の方とお話をさせていただく時間が多かったです。その中で、手宮に映画館があったと聞いて信じられなかったのですが、今日お話を聞いて合点がいきました。励ましの坂のお話が好きな方もいて、お話を聞くのがとても楽しかったです。今回みなさんのお話を聞いて印象的だったのは、手宮のことをすごく大事にされているなということです。今後の手宮にどうなってほしいかは人によってビジョンがそれぞれ違っているのではないかと思いました。観光を発展させていきたい、かつての活気を取り戻したい、より住みよい手宮にしたいなど、色々あると思いましたので、価値観の共有を図れたらいいのではないでしょうか。個人的に手宮の昔話を聞くのも面白いので、このような機会はすごく良いと思いました。見聞を広げるということを大切にしながら学生生活を過ごしたいと思っています。

●**落合亮さん（学生 2年生）**：私も2年生ですが商大4年目です。写真部に入っています。手宮はよく写真撮影に来ています。放課後にぶらっと自転車で手宮に来たりします。手宮の風景は地元の人にとっては日常にありふれた風景なのかもしれませんが、札幌出身の私から見ると、本当にぐっとくる風景だと思います。でも、住みたいかと言われたらまた別なんですよね。手宮のまちを住んでいる人も魅力に感じるようになってほしいと思います。こういう風景は札幌にはほとんどないですよ。坂の上にたくさん家が建っていて、駐車場の利便性などは全く考えていないように見える風景はすごく新鮮です。手宮にはたくさん観光資源があって、小樽観光のフロンティアだと言われますが、いまの堺町通りのような雰囲気になっては意味がないと思います。住んでいる人が手宮の魅力を感じるようなまちづくりが大切です。観光はまちづくりのために利用するツールだと思います。堺町通りは観光のためのまちづくりのようになっていますが、手宮はその逆に、まちづくりのために観光を利用して魅力的なまちを創っていけたらよいのではないでしょうか。ここに来ている人はほとんど手宮が大好きな人だと思いますが、あまり手宮に関心がない人も多いのではないでしょうか。

ディスカッション

●**遠藤久子さん**：ほとんど何もお話できませんでしたが、若いみなさんに少しは何かが伝わったでしょうか。お嫁に来た時びっくりしましたが、今では手宮は本当に素晴らしいまちだと思っています。ずっと生涯愛していきたいと思いますので、元気でより良い人生を送れるようにしたいです。もう少し手宮が元気になってくれたらいいなと祈りながら日々暮らしております。微力ですが、私もまだまだ頑張ろうと思います。本日はありがとうございました。

●**嶋影良彌さん**：手宮って単純にいいまちなんです。だから私からのお願いとしては、みなさん手宮へしょっちゅう足を運んでほしいです。そして、手宮の子どもたち、中学生や高校生たちと接点を持っていただけたらいいんじゃないかなと思います。運河公園でやっている商大の縁日には孫を連れて行っていますが、そういうつながりを大事にしていきたいです。今後、手宮の発展はみなさん若い人たちの力にかかっていると思います。今日集まってくれているみなさんが力を貸してくれます。それが手宮というまちです。

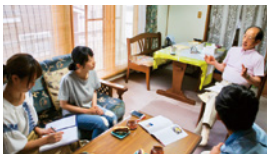
●**佐々木一夫さん**：先程、商大生のみなさんがかなりどきっとするようなことをおっしゃってくれましたが、島崎さんが言っていた価値観の共有はとても大事な問題だと思います。みなさん手宮を好きだと言いますが、好きの度合いや、何が好きなのかということは人によって違うと思います。島崎さんは商大生から見て、どうにすれば手宮に住んでいる人が価値観を共有できるのか、年寄に教えていただければありがたいです。

●**島崎翔さん**：私が価値観の共有ということで言いたかったのは、今回のようなイベントに来て下さる方以外に、地域にあまり関心がない人たちがある程度いらっしゃるとかんじています。そういう方たちの意見も取り入れることが出来れば真の意味でのまちづくりにつながっていくのではないかという思いで価値観の共有という言葉を使わせていただきましたが、具体的にどうすれば良いかはなかなか難しいですね。今日のお話にあった町内会のつながりというのは重要なつながりだと思います。商大生がまちに下りてもっと地域と関わることが必要ですね。

●**山下秀治さん**：私は商大の翔楽舞の立ち上げの一番最初期に関わりました。翔楽舞を立ち上げたいがお金がないという話から始まって、我々は商売をやっているので若干お金はあるけれども若い世代がいないということで、だったらボランティアをしてくれたら、それなりに金は集めるという話になりました。いか電祭りの最盛期は商大生が2日間で150人くらいお手伝いしてもらったことがあります。本当に商大生のおかげだと思っています。今後ともよろしくお願いします。

●**安斎哲也さん**：今回、私がパネラーとして参加させていただいているのは大変恐縮ですが、他のみなさんのお話をお伺いして大変勉強になりました。私もご来場のみなさんから学べということで呼んでいただけたんだと思います。私は商大で授業をさせていただいますが、今日はみなさんの発言から逆に勉強させていただきました。先輩の皆さんからお話を聞いて、共有をさせてもらって、それを子どもたちにどんどんつないでいくことが手宮のまちづくりになると思っていますので、こういう機会がどんどん続いていってほしいと思います。本日はありがとうございました。

インタビューの様子



小樽のひとに学ぶ【2017 年度版】

～小樽商大生が小樽のひとにインタビュー～

編集・発行　国立大学法人小樽商科大学グローカル戦略推進センター
研究支援部門地域経済研究部

〒047- 8501 北海道小樽市緑 3 丁目 5 番 21 号

電 話　0134-27-5482

H P　http//www.otaru-uc.ac.jp

発 行　平成 30 年 3 月

文部科学省 地(知)の拠点